

機動戦艦ナデシコ ～The Prince of darkness～ II ? 傀儡の見る
『夢』?

you.

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【The blank of 3 years】

空白の3年間、電子の妖精は家族を失った。

それがどんなに辛くとも、彼女は生きていく。

時は流れ

悲しみが思い出へと変わり、新しい家族と仲間が出来た。

その頃流れ始めたある噂。

《ヒサゴプランのコロニーを『幽霊ロボット』が襲っている》

その数『2機』。

1機は復讐人、テンカワ・アキト。

もう1機は…

目次

【プロローグ 前編】	1
【プロローグ 中編】	10
【プロローグ 後編】	21
第一話【幽霊ロボット『二機』】	32
第二話【Nightmare『Black』】	43
第三話【Shiver『Gold』】	55
第四話【アイツの『名前』】	68
第五話【火星極冠の『パペット』】	87

【プロローグ 前編】

「ごめん、ルリちゃん」

「……」

「僕はもうナゲシコには戻れない……」

あなたは

うつむくわたしに

悲しそうに

でも

はつきりと

そう言った

「……カイトさん。わたしのお願ひも、ひとつだけ、聞いてもらえますか？」

「……」

「わたしに、キス、してください」

「ルリちゃん……」

「そうすれば……！」

「わたしにも、変えることができるかも……！」

わたしのすべてを

あなたに捧げます

身も

心も

この唇も

流れ落ちる

この涙でさえ

わたしのすべては

あなたのもの

だから

だから

この言葉も

あなただけのもの

「バカ……!!」

真つ暗な宇宙

エステバリスのコックピット

計器が照らす僅かな明かりの中で

もう二度と使わないであろうその言葉を

わたしは、もう一度だけ呟いた

「カイトさんの……ばかあ……!!」

だんだんと遠ざかる

「彼」が眠る木星プラント

涙というフィルターを透して見る

その巨大な建造物は

今まで見たものの中で

一番悲しく見えた

機動戦艦ナデシコ

∫ The Prince of darkness II ∫

— 傀儡の見る夢 —

【プロローグ 前編】

「バカ……か」

「主」を失い、次々とその機能を停止してゆく木星プラント。徐々に静寂に近づいていくその中心部で、彼は一人呟いた。聞き取りのみに設定していたコミュニケーションの電源を切り、己の女々しさに苦笑する。

「僕にピッタリの言葉だな」

ゆっくり、本当にゆっくりと光が消えていく。「彼女」の眠るカプセルに近づく。

「イツキ……」

その名前を呼ぶ。

自分を探していた彼女

そんなことも知らなかった自分

自分の対として 恋人として 一緒に創られた彼女

突然いなくなった自分

ずっと待っていた彼女

全部忘れていた自分

裏切られ 絶望した彼女

その彼女を殺した自分

『ずっと、待ってたんだよ……ミカズチ』

—微笑んだ 彼女—

そつと、その頬をなでる。

「ずつと、忘れていてごめん。遅かったけど……遅すぎたかもしれないけど」

愛おしそうに、でも、悲しそうに。

「これからは、ずつとそばにいるよ。すぐ隣にいる。ほら、もう寂しくないだろう？だから……」

そして、キスを。

「おやすみ、イツキ……」

彼の言葉に合わせるように、プラント内は闇に包まれた。

プシュ……ウ

音が響き、彼女の眠るカプセルが閉まる。もう一度彼女を見つめたあと、対として並んでいたカプセルに寝転び、そつと目を閉じた。

走馬灯だろうか。瞼の裏に思い出が映った気がした。

ナデシコに現れた時のこと

佐世保での生活のこと

ナデシコクルーの騒々しさ

ユリカの家が想像よりはるかに大きかったこと

ジユンがいろいろと世話をやいてくれたこと
ラーメン屋台でアキトと一緒にラーメンを作ったこと
初めて「家族」を感じたこと
大晦日のジャンプ実験の失敗
ミナト、ユキナと一緒にナデシコBのクルーを集めたこと
楽しいこと
悲しいこと
数え切れないくらい沢山の思い出
全てはきつと思いつけない
だが
一つだけ確かに覚えている
絶対に忘れない
忘れることはない

いっぱいその思い出すべてに「君」がいた

『そうですね。ふふ……!』

一緒になって笑い、そばにいただけで幸せだった。

『……次からは、最初から押し入れで寝てくださいね』

オロオロして、どうやって機嫌を直してもらおうかを必死で考えた。

『カイトさんの……力になりたいと、思いました』

不器用な優しさが、ただ嬉しかった。

『わたしにも……変えることができるかも……!』

その唇の感触に、決心が揺らいだ。

……だけど……

そこまで考えた時、静かに響いていた最後の機械音が消え、辺りは完全な静寂に包まれた。

シユウウウ……

カプセル内に冷たい気体の流れ込む。大きく息を吸い、その気体を全身に取り込んだ。

(ああ……眠いな……)

急速に訪れた眠気、少しずつ薄れてゆく意識の中で僅かな間だが、この狭い世界で精一杯愛し愛されたもう逢うことのない、一人の少女の名前を呟いた。

「……ルリ……」



ガ……オオオ……ン

ナデシコBに、エステバリス、カイト機が着艦した。

仕事そっちのけで格納庫に集まるクルー達。

「な、なんだなんだあ〜!? ブリッジのやつら全員で来やがって……大丈夫なのかよ」

突如人口密度が増えたその場を見てあきれろウリバタケ。その後ろから、やや遅れてヒカルがやって来る。

「大丈夫だってウリピー! だーれもいなくなつてナデシコは動くんだから〜」

ちなみに全てオモイカネ任せである。
「やっとな帰ってきやがったな! あいつら!」

心底ホツとした表情でリョーコが呟き……もとい、ちよつと興奮気味に叫びながらエステバリスに向かって走り出した。そして、皆叫びはしなくとも、リョーコと同じく安心した顔をしている。コックピットが開き、ルリが顔を見せると、皆がエステバリスの周りを取り巻いた。……ちよつと遠くから『「バンザイ!」バンザイ!!』などという大げさな掛け声も、涙声を交えつつ聞こえている。そこにウリバタ

ケの声が混じっていたとかいないとか。

「おかえり！ ルリルリ！」

ミナトがリフトから降りてきたルリを抱きしめる。

「もう！ 帰りは遅いわ、コミュニケーションは繋がらないわですっごい心配したんだから」

「……すみません……」

「ううん、帰ってきてくれればそれでいいのよ」

「はい……」

「うん。それで……カイト君は？」

その言葉に俯くルリ。

「どうかしたの？……ルリルリ？」

「あれ？カイト君いないよ？」

コックピットを覗き込みに行ったヒカルがタイミングよくそんな声を上げる。その声につられ、リョーコとイズミもコックピットを覗き込む。

「ほ、ホントだ！カイトがいねえ！」

「コックピットにはいないわね」

腕の中のルリを見つめるミナト。その身体は小さく震え、呼吸が不安定なことに驚く。

「……せん」

「……え？ 何？ ルリルリ？」

聞き取れないほどのかすれた声。

「ん？ どうしたんだ？…おーい！ ちよつと静かにしろおー！」

後ろで整備班と一緒に騒いでいたウリバタケも様子に気付いたよ
うで、皆を黙らせる。

「カイトさんは……」

三人娘もエステバリスから降り、ミナトのそばまで来る。その場は
怖いほど静まりかえっていた。皆、ルリの次の言葉を待つ。そつとミ
ナトの腕を外し、一歩前に入るルリ。

そして皆に告げた。彼との、おわかれの言葉を。

「カイトさんは、帰ってきません」



ドタドタドタ！

古いアパートに騒音が響く。

「アキトアキトー！これはどこに置くー??」

「あー、もう狭いんだから走るなよ……ってまだ何か飾るのか!？」

アキトの部屋。四畳半のスペースでなにやら作業をしている二人。部屋の主は狭いキッチンで料理を作り、騒音の主は走っている。どうやら何かの飾り付けをしているらしい。

「当然だよ！ やつとルリちゃんとカイト君が帰ってくるんだから！」

ユリカがクリスマスツリーを部屋の隅に置く。

「うーんと豪華にしないとね！」

ユリカが笹の葉を押し入れに飾る。

「うわー！ もう外まつくらー！」

ユリカが窓に屋台の暖簾をかける。

「……はあ」

アキトは愛すべきパートナーの本日の行動を思い起こしてみた。

ナデシコBの帰艦日が今日だと聞くやいなや『ルリちゃんカイト君おかえりなさいパーティを開催する』と、御統家から大量に四季折々の色々なモノを持ち出してきた。おかげで彼の狭い城は今やミスマル家の領地と化しており、乱雑に置かれたモノのせいで歩くのも困難な状態である。

(ユリカは加減を知らないんだよなあ)

しかしそうは思っていないでも、惚れた弱み。そこも可愛く見えてきてしまう。

(なんにでも一生懸命なんだよな！そこがユリカのいいところだし)

「ん？ どうしたの？ アキト？」

「いや、そうだな。やっと家族が帰ってくるんだ、とことん豪勢にいかないとな！」

「さすがアキト！ わかってる！」

四畳半の新たな領主は嬉しそうにうなずくと、新たなモノを抱え外に向かった。

「門松飾ってくるね！」

「おう！ どーんと飾ってやれ！」

アキトは調理に使っていたおたまをかぎして、笑ってユリカに答えた。

きいいい……がちやん

木の軋む音を立てて、ゆっくりと戸が閉まる。

ぐつぐつぐつ……

鍋の音が狭い部屋に響く。

ぱー……ふー……

豆腐屋のラッパの音が遠くから聞こえる。

ビービービー!!!

「おお!?!」

ビクン!

突然の大きな音におたまを落とす。素早くそれを拾い直すと、この場所に不釣り合いなその音の元凶を探った。

(！ あれか)

鳴り続けている音の元凶が、ユリカのコミュニケだと気付くのにその時間はかからなかった。着信が昔馴染みの仲間だった為、躊躇わず応答する。

「はいはい、こちらテンカワ。ユリカなら……」

「うん……えっ……?」

再度床に落ちたおたまが音を立て、回って、止まった。

T o B e C o n t i n u e d

【プロローグ 中編】

「本当にここまででいいのですか、ルリさん？」

車から降り、曇りのない夜空を見上げている少女に、プロスペクターが囁く。

「はい、ありがとうございます」

ルリは一度会釈をすると、そのままスツと夜の闇へと溶けていった。

自分も車から降り、その後姿を目で追う。

「ちゃんと家に帰ってくださいよー！……うーむ。危ういですねえ」

車に乗り込み、キーを回すと、心地のよいエンジン音が聞こえてきた。そのままアクセルを踏み込み、顎に指を添え考える。

(無理ありませんな)

しばらく無心で車を走らせる。景色の色が緑色から灰色へと変わってゆく。街の灯りが線となり通り過ぎ、消える。ふと、先ほどのルリの言葉が浮かぶ。

『少し……歩きたいんです……』

愛する者を失った悲しみ。それは失った者にしか判らないだろう。もし、それを少しでも癒せるものがあるとすれば。

(そうですね、ルリさんは「自分で話す」と仰ってましたが……。それに彼女らにも辛いことを伝えなければなりません……。『家族』ならばきつと)

コミュニケへと視線を移す。

「すみませんが、お節介を焼かさせていただきました。頼みましたよ2人共」

ピー。

そして、かつての艦長へとコールを。

近所の公園。もう人気もなくなったその場所を、ルリは一人歩いていた。

とぼとぼ……

ユキナならきつとそんな擬音を口走っただらう。

聞こえるのは虫の音。見えるのは僅かな家の灯り。そんな灯りを見ていると急に寂しくなり、涙が滲んでくる。

(……)

唇をぎゅつと噛む。滲んできたものを手の甲で拭い、ずんずん歩いた。涙の跡があれば、2人に心配をかけてしまう。その小さな公園を抜けるまで、ルリはずんずん歩き続けた。

そして、どのくらい歩いただろう。懐かしいアパートが見えてくる。テンカワ家の窓には、何故か暖簾が掛けてあった。ルリは今にも壊れそうなその古いアパートの階段を上る。ぎしぎしと、足場が音を立てる。

(なんて伝えよう……カイトさんは、もう帰ってこないんだってこと)

部屋に近づくにつれ、だんだんと足取りが重くなるのを感じた。

(やっぱり、今日はミナトさんのところに……)

そんな考えを頭を振って打ち消す。

(しっかりと、伝えなくちゃ……)

がちやり

最後の一段を上ると同時に、少し離れた戸が開く。

びっくりして、立ち止まるルリ。

開いた戸から巨大な門松が……いや、巨大な門松を抱えた女性が出てくる。

「これは……ごこと。うんうん！ばつちり！」

狭い玄関前にその門松を置き、満足げにうなづく女性。

(ユリカ……さん)

ユリカを確認した瞬間、力が抜ける。持っていた荷物は重力のまま地面に落下した。その音に、ユリカも首をかしげるようにこちらを向く。

パー……フー……

「……」

「……」

遠くで豆腐屋のラッパの音が聞こえる。

無言で見つめ合う二人。

「ルリ……ちゃん？」

「あ……」

「やっぱりルリちゃんだー!!」

勢い良くルリに抱きつくユリカ。

「ルリちゃんおかえりー！ うわー！ ホントにルリちゃんだー！

おかえりー！ ルリちゃん！」

しつこいほどに「ルリちゃん！」と「おかえりー！」を繰り返し、やたらと頬振りをしてくるユリカ。ルリは、胸と目頭が再び熱くなるのを感じた。そしてもう一度同じ言葉を繰り返し発したユリカは、いつも隣にいたはずの「彼」のことを尋ねる。

「それで、カイト君は？」と。

「カイトさんは……」

「ん？ 聞こえないよ、ルリちゃん？」

「カイト……さんは……」

言おうと決めていた。言えるはずだった。

「カイト……さんは……は……」

あの時は言えた。今また言えないはずはない。

「カイト……さん……」

だめだ、泣いてはいけない。ナゲシコでは耐えられた。だから、今度も。

「え？ え？ ど、どうしたの、ルリちゃん？」

なのにどうして、出て欲しいのは言葉なのに。どうして涙ばかりが

出そうになるのか。

がちや!!

「ユリカ！ カイトが!!」

再び戸が開きアキトが飛び出してきた。すぐに二人の姿を見つける。

「どうしたの？」と目で問うユリカ。

その瞳に少しうつむき、そして真っ直ぐユリカを見つめる。それだけで、ユリカはすべてを理解した。

カイトはもう、帰ってこないのだと。

「ルリちゃん……！ 辛いね……！ 悲しいね……!!」

ぎゅつと、強く。

強くルリを抱きしめるユリカ。

ユリカの目からも、ボロボロと涙が零れ落ちる。

「ごめんね……！ 私、なんにもできなくて……！ ごめんね……！」

暖かい雫がルリの頬を濡らした。その感触に涙腺が緩むが、ルリは必至に堪える。

「ルリちゃん」

アキトが近寄り、その腕で二人を包み込み、優しい声で、言った。

「悲しいときは、思いつきり泣いていいんだよ」

「!!」

その言葉に、抑えていた想いが、ふくれて、はじけた。

「カイト……さあん……！」

ナデシコB艦長としてのルリ。いつも冷静なルリ。大人顔負けの戦闘指揮で、皆の信頼を集めるルリ。

でも今ここにいるのは、大好きな人を失った、ただの13歳の少女だった。

「いかないで……！ あの人のところになんかいかないで……！」

一度溢れだした想いは、もう止まらなかった。

「わたしのそばにいてください……！ ……！ ずっとずっとそばにいてください……！」

あのととき言いたかったこと、今まで言いたかったこと。

「また頭をなでてください……！ わたしだけに笑いかけてください……！ わたしにだけに優しくしてください……！ わたしだけを見てください……！ すきつて……言ってください……！ ひつく……いかないで……！ いかないで!!!」

幼子が駄々をこねるように、ルリは泣き続けた。

「ひっ……く……どうして……？ どうして!? カイトさん……！ カイトさん……!! カイトさあん……!!! う……うわあああ……!!!」

ユリカの胸が、涙で濡れた。



窓の縁に腰掛ける

月の、大きな夜。

静かで暗く、でも、明るい夜

窓の縁に腰掛けて、アキトはぼんやり月を見ていた。ふと部屋に目を向けると、泣きつかれて眠ってしまった二人がいる。その頬にはまだ涙の跡が残っていた。そのまま視線を押し入れに移す。

もしかしたら、アイツは帰ってきてるんじゃないか？

そんなことが頭に浮かび、押し入れの前に立つ。襖に手をかけ、そのまま横に滑らせた。

『アキトー!』

「!!」

押し入れの中に彼の姿が一瞬見え、消える。そこにあるのは、まだ片付けていない布団だけ。

(そりゃそうだよな……)

自分のとつた行動がひどく可笑しく思え、苦笑する。

窓の縁に腰掛ける。

月の、大きな夜。

静かで暗く、でも、明るい夜

アキトは、自分たちをおいていなくなった『アイツ』の名前を、もう一度つぶやいた。

「カイト…」

窓の縁には、一粒の雫。



星の数ほど人がいて

「にしてもいまさら火星なんてなあ」

「いいんじゃないですかあ？ お二人の思い出の場所なんですから」

空港のロビー。

新婚旅行の場所に不満を漏らすリョーコにメグミが答える。

「なにになに〜？リョーコったら〜。自分だったらほかの場所にするって言いたいのかなあ??」

「な!?そ、そんなんじやねえ!」

「おーおー…どもってるどもってる」

「う、うるせえ!!」

いつも通り墓穴を掘るリョーコにつっこむヒカルとイズミ。

当の本人たちはもう遠くで手を振っている。

「いってきまーす！」と、とびきりの笑顔で。

星の数ほど出会いがある

少し離れた屋上から、二人のシャトルを見送っていたクルーの面々。その場所には、どこから沸いたのか、人、人、人。人の嵐。新婚旅行の見送りに100人近くも来るのはどうなのか。

「いってらっしゃーい！って、ねえルリルリ？ホントについていかなくてよかったの？」

「はい。お2人の邪魔になりますし」

手を振り終えたミナトが、隣にいたルリに話しかけた。

ユリカとアキトの新婚旅行。先日ルリは二人に誘われていたのだ。「一緒に行かないか？」と。そんな二人の心遣いがすごく嬉しかった。でも。

（これ以上迷惑かけられませんからね）

あの後、自分たちも結婚式の準備で忙しいのにもかかわらず、ずっと一緒にいて、ずっと励ましてくれた。ルリが今こうしてられるのも、きつとテンカワ夫妻のおかげなのだ。

（本当にありがとうございます。これから、どうぞよろしく。新婚旅行楽しんできてくださいね）

心の中でお辞儀をし、まだあそこに見える二人の乗るシャトルに微笑みかけた。

そして

（天気予報どおり。今日はいいい天気…気持ちいい）

皆同じ気持ちなのか、見送りが終わってもそこから動かず、清々し

い太陽の光と心地よい風を感じていた。

「……さーて、帰るかな！」

誰かがつぶやき、そろそろと空港の中に戻り始める。

「私達もいこっか、ルリルリ」

ミナトの言葉に笑顔を返すルリ。

ビュウウウウウウウ……!!!

強い風が吹き、かぶっていた帽子が飛ばされた。

(あ……)

宙に舞う帽子。目で追いかけて空を仰ぐ。

見えたのは、「彼」にもらった帽子。真つ白な光りに照らされたその帽子が、ふいに色を変えた。それは、夕焼けのように綺麗な紅。

別れ

ゴオオオオオオオオオオ

爆音は後から来た。!!!!!!!

「きやああああああ!!!」

「うわああああ!!!」

「な、なんだあ!!!?!!」

とつさに耳を塞ぐ。

音が止み、皆が見上げたその先には、先ほど飛び立ったシャトルはなかった。

代わりに見えたのは、黒い煙と、シャトルであった『モノ』。

「な……」

「そんな！」

「い……いやあ……!!!」

悲鳴、泣き声、声、声、声。

ある人は走り、ある人は泣き崩れ、ある人は立ち尽くす。

「……なんなのよ……これ……」

今だ状況をつかめないユキナが、ミナトの服を引っ張る。その指は震えている。

「ミ、ミナトおねえちゃん……ねえ、どうなったの!? あれって……シヤトルだよねえ!? ユリカさんとアキトさんは……? ねえ、どうなったの!? ねえ!?!」

「……っ!! うるさい!」

「!!」

「あ……」

信じられないくらいの大声を上げた自分自身に驚くミナト。

「……う……うええ……」

「ご、ごめんなさい、ユキナちゃん」

ユキナを抱きしめるミナト。その背中を撫でながら周りを見渡した。

……いない。

「ルリルリ……! ユキナ、一緒にルリルリを探すの! 分かった!?!」
ユキナと同じ視線の高さまで屈み、その目を見つめる。彼女がしつかりとうなずくのを待ってから、すぐにルリを捜し始めた。

「……ルリルリ!!」

その子はすぐに見つかった。

フェンスのすぐ前、空を見上げる後ろ姿が見えた。

(よかった……! いてくれた!)

何故か判らないがルリが消えてしまうような予感がしていたのだ。

ホツと胸を撫で下ろすと、小走りでルリに近づく。

「ルリル……」

もう一歩でその体に触れるというところで、ルリの影が左にぶれた。

「ルリルリ!!」

すんでのところでルリを抱きとめるミナト。その小さな体がすっぽりミナトの胸に収まる。

「ルリルリ!! ちよっとルリルリ!? 大丈夫!? 誰か! 担架を、早く!」

「ルリ!？」

ユキナも駆け付け、心配そうにルリの顔を覗きこむ。

― ルリルリ!! ―

(大きな声が聞こえる……)

― ルリルリ ―

(この声はだれ?)

― ルリ ―

(あたたかい)

― ルリちゃん ―

(ああ……そうか。わたし……帰ってきたんだ)

― おーい! ルリちゃん! カイト! ―

屋台でラーメンを作るアイトさん

― ルリちゃんルリちゃん! みてみてー! ―

近くににいるのに大声で、走って抱きついてくるユリカさん

そして

― ルリちゃん ―

帰ってきてくれたんですね

カイトさん

幸せな夢に抱かれ、ルリは意識を手放した。
その手に白い帽子を握り締めて。

T o B e C o n t i n u e d

【プロローグ 後編】

人が通り過ぎる

頭を下げる

人が通り過ぎる

頭を下げる

人が通り過ぎる

頭を下げる

お坊さんが 長い 永い お経を読んでいる
今日

先日のシャトル事故で亡くなった

テンカワ夫妻のお葬式が

予定通り行われた

わたしは

ユリカさんのお父さん

ミスマル・コウイチロウさんをお願いして

親族側につかせてもらった

線香の薫る場内

白黒の幕

花で飾られた場内

黙祷を終えた人がまた一人

目の前を通り過ぎる

いったい なにを祈ってきたの？

あの

中身のない

四角い木の箱の前で……

また一人

人が通り過ぎる

【プロローグ 後編】

「がらららら、ただいまー!」

ミナトの借家の引き戸を開け、ユキナはつぶやいた。相変わらず擬音を口に出す癖は治っていないようだ。まだ夕方だが、部屋は薄暗い。

「暗いわね……ぱち……つと」

「おかえりなさい」

「!？」

照明のスイッチを入れるユキナ。居間の真ん中にルリがいたことに驚く。

「……びつくりした〜! あんた、電気くらいつけなさいよね!」

「……すみません」

「はあ、暗いわねえ……」

「すみません、暗いところも嫌いじゃないので」

(部屋じゃなくてあんたのことを言ったのよ……)

畳の上にきちんと正座して、ぼ〜つとテレビを見始めたルリの横を通り過ぎるユキナ。冷蔵庫からポットを取り出し、冷たい麦茶をコップに注ぐ。少なくなったそれを見て、また作らなきゃ、などと考える。

「あんたも飲む?」

「いいえ。のど、乾いてませんから」

「あっそ」

ユキナはグイと麦茶を飲み干すと、ルリに視線を戻す。

あの事故の後、ルリはミナトに引き取られた。

テンカワ夫妻に引き取られた後も、常にルリを気遣っていた彼女にまかせるのが一番だ、と皆から判断されたからだ。ミナトに断る理由はなかった。もちろん、一緒に住んでいるユキナにも。

(まあ……『暗くなるな！ 元氣出せ！』っていつてもムリだよねえ……あたしもあの時そうだったし。あたしじゃ、力になれないのかなあ)

ふとユキナの頭に、強く優しくかった兄の笑顔が浮かぶ。その表情に、少し勇気が湧いた。

覚悟を決めて、無表情でお笑い番組を視聴しているルリの隣に腰を下ろす。

(でも、何も言わないよりはマシだよね！)

さっそくなにか元氣の出る話題を振ってみることにする。

「ねえルリ？」

同じ家で暮らす家族になった日から、『ルリちゃん』から『ルリ』へと呼び方を変えた。

「なんですか？ ユキナさん」

「うん、あのさあ〜」

「はい」

「……いや、あのね」

「はい」

「…………」

「……？」

いざ話すとなると、共通の話題が少ないことに気付くユキナ。

「……ぴんちね」

「？」

思わぬ伏兵の登場により、ユキナの『ルリを元氣付けよう大作戦』は早くも終局を迎えていた。

(あー！ どうしよう!! いつもならミナトおねえちゃんがいるから話題には困らないのに!! 早く帰ってきてよおねえちゃん!)

ミナトは夕飯の買出しでスーパーに寄っており、少し遅れて帰ってくることになっていた。彼女曰く『美味しいものをおなかいっぱい食べれば、元氣が出る』だそうだ。

(だけど今は美味しいものより話題が欲しい……)

しばらく考えた後、たまたまそこに置いてあった新聞に話題を求め

るユキナであった。

「ほ、ほらあ！ これ見てよ！ 『あの人気格闘ゲーム！ —ファイティングカンジス—新作導入！』だって！ 今度対戦しにいこー！」

「……はあ」

やけくそで、書いてある見出しを片っ端から読み上げてゆくユキナ。

「なになに……『○×証券、株価暴落』！ ぺら……『火星圏で謎の電波受信』！ ふむふむ……『地球内でのテロ、相次ぐ』！ うくん、悪人って減らないものよねえ……次は……」

そしていつの間にか当初の目的を忘れ、自分が新聞に見入ってしまった。

「ふむふむ……」

「……」

取り残されたルリ。テレビに視線を戻す。相変わらず、興味をそそるような番組はやってなかった。

(今日はもう……寝ようかな……)

スツと立ち上がり、居間をあとにしようとした、その時だった。

「ぺら……『木星プラント、謎の爆発』う？ もく、なんでもかんでも謎、謎って〜！ わかってから報道しなさいよ！ まったく」

ぞわ……

ルリの背中に悪寒が走った。

先ほどのユキナの言葉を思い返す。

— 木星プラント —

— 爆発 —

「!!」

パツと振り向くと急いでユキナの隣に座り、その新聞を強引に奪い取るルリ。

「えっ…えっ？ なになに?!」

突如横から現れた手にそれを奪われ、おたおたするユキナ。

奪ったルリは、もてる神経の全てをその記事に集中させる。

ドクン

——先日発見された、木星圏ガニメデ・カリスト・エウロパ・及び他衛星小惑星国家間反地球共同連合体、通称「木連」の大規模兵器工場であるとされる木星プラントから、最近まで起動していたと見られる反応が検出された ——

ドクン……ドクン

——その原因調査のため、急遽調査団が結成、2組に分けて派遣された。しかし…… ——

ドクン……ドクン……ドクン……ドクン……ドクン

——……しかし、調査団1班のシャトルが着陸した瞬間、爆発。シャトルとプラントは跡形もなく消え去ってしまった ——

ドクン……

——跡形もなく ——

ドクン!!

——消え去って ——

「……っ！」

ルリの手から新聞がこぼれ落ちる。

「え？ ルリ……？」

ゆら……と、音もなく立ち上がったルリを見上げるユキナ。薄暗い部屋のせい、ルリの表情が読み取れない。

「だ、大丈夫？」

声をかけるユキナの横を無言で歩き出すルリ。玄関で靴を履き、何も言わずに家を出る。

「え？ 外に行くの……？ でももう夜……」

淀みのない、いつも通り過ぎるその動きにユキナの行動が遅れた。一人になった部屋で、今更ながらルリの異質さに気付く。慌てて立ち上がり、ダッシュで部屋を出るユキナ。

「ちよ、ちよと待ってルリ！」

開けっ放しだった玄関の敷居をまたいだところで何か柔らかいものにぶつかる。

「わぶ!!」

「わっ！ ……と、ユキナちゃん？ あんた靴も履かずに……」

「ミナトおねえちゃん!!」

両手に買い物袋をさげたミナトに抱きつくユキナ。

「おねえちゃん!! ルリみなかった!」

「え? ルリルリ? 見てないけど……どうかしたの?」

「飛び出していっちゃったの!!」

「え!? なんで!」

「わかんない!! ……あ」

「なに!」

「……新聞」

「え?」

「そうだ!と手を打って、居間に落ちている新聞を指差す。

「あの新聞読んでから、ルリ、急にポーっとしちやって……!」

「! あの新聞ね」

居間に落ちていたそれを手に取り記事に目を通す。欲しい記事はすぐに見つかった。

—— …… 跡形もなく消え去ってしまった。この事故により調査団1班全員が死亡した。

事故の原因は「施設の自己防衛機能の起動」であると予測されている。——

その下は、くしゃくしゃで読めなくなっていた。

「……カイト君……ルリルリ」



「どうやってここに来たのだろう。」

タクシーを拾ったのか、電車で揺られてきたのか。とにかく、わたしが気付いたときには、もうこの川原にいた。銭湯の帰り道、よくあの人と話をした、この川原に。

まだ鮮明に覚えている。あの時もこんな静かな夜だった。満月が

きれいで、川に映った星達がキラキラとゆれていて、川の音に二人で耳を澄ませていた。

—もしそれが……—

—とても辛い、悲しい記憶だとしたらどうですか？—

—それでも、思い出したいですか？—

あの人は少し俯いて、でもすぐに顔を上げて。まっすぐに、わたしを見つめて。

—それでも、思い出したいよ—

微笑んで、そう言った。

胸の鼓動が高鳴り、頬が一気に熱くなった。

(わたし……どうすれば……)

思い出から現実に戻ったわたしは、体育座りをしていたひざの間に顔をうずめた。

あの事故の日から、目を閉じるといつも家族の顔が脳裏に浮かぶようになった。

アキトさん、ユリカさん、そしてカイトさん。わたしの記憶の中の三人は、いつも悲しそうな顔をしている。きつと一人になったわたしを見て、可哀想だと思っているのだろう。その表情を見る度、わたしの気持ちも沈んでいった。

「ひとりに……なっちゃいました」

口に出すと、更に寂しさが襲ってきた。

……もう、いつそのまま、冷たい川の深くへと。

わたしは自暴自棄になって立ち上がった。

……でも。

「ひとりじゃないよ」

その時わたしを包んだのは。
「ひとりじゃないよ、あたし達がいるよ……ルリ」
川の冷たさではなく。
「そうよ、ルリルリ」
人の、温かさだった。



「ユキナさん、ミナトさん……」
「はあく。それ、付けてくれてよかったよ……」
ユキナがルリの腕のコミュニケーションを指し、そのまま体に抱きついた。
「え……？」
「プロスさんに協力してもらったのよ？」
少し後ろにいたミナトが、ユキナとルリ、二人の肩を抱く。
「あの……？」
「もう！心配させないの！ルリルリ！」
ミナトがルリを叱る。でもその声は優しくかった。
「ユキナなんて心配し過ぎて泣いちゃってるんだから」
「泣いてなんか……ないわよお……！」
ミナトに反論するユキナ。
いつの間にか、ルリを抱く腕が、体が震えていた。よく見ると目が赤い。涙の跡も見える。
「……すみません」
「謝るんじゃないわよお……！」
ユキナが鼻声で続ける。
「もっと頼ってよお……！ あたし達、『家族』でしょ!？」
「……!!」

ユキナの言葉に、ルリの視界がぼやける。
微笑むミナト。

「やっとな泣いてくれた」

「ミナトさん……？」

ミナトの言葉で、自分が泣いていることに気付くルリ。

急いで目元を拭おうとする手をそつと握るミナト。

涙は流れ続ける。

「あの……？」

「ルリルリ、お葬式の時も泣いてなかったでしょ。涙つてのはね、感情の塊なの。とつても重いものなのよ。溜めて溜めて……持てなくなったら必ず溢れるものなの。ずっと溜めたままだと、その重さで気持ちが深く深く沈んじゃう。さっきのルリルリみたいだね。だから……」

ミナトの手のひらが、ルリの頭をそつと撫でる。

「おもいつきり、泣いていいんだよ？」

その言葉を聞いたのはいつだったか。

「——っ！……う……！！」

ルリは泣いた。おもいつきり泣いた。それを見ていたユキナも泣いた。ミナトもきつと泣いていただろう。

みんな泣いて、そして笑った。

今、ホシノ・ルリの記憶の中の三人は笑っている。

その表情を思い出すだけで、ルリは少しだけ幸せな気持ちになれるのだ。



「すみませんなあ、博士。『彼ら』がさらわれてしまいました……」

あなたの身も危険なので『死んで』もらわなければいけないのですよ」
男の声が響く。

「すまないことは、もう少しすまなそうに言って欲しいものね」
女の声が響く。

「これが性分でして、はい」

「ええ。わかってるわ」

「それはそれは……ん？　なにを読まれてるんです？」

「新聞よ」

「紙媒体とはまた……」

「あら？　たまにはいいものよ。いつもディスプレイばかり見ても飽きちゃうでしょ」

「そういうものでしょうかねえ」

「さて……つと」

座っていたソファに新聞を投げ出し、立ち上がる。

「それじゃ、『死にに』行きましょ」

「はい。ではエスコートいたします」

暗闇へと溶ける二人。

女は死への道を歩きながら、先ほど読んだ新聞の記事を思い出していた。

―― ……事故の原因は「施設の自己防衛機能の起動」であると予測されている。――

―― だが確証は無く、爆発の原因は未だ不明。――

―― さらに、現場付近で観測されたボソン反応や――

―― 検出された微量のレトロスペクト反応の原因も……――

機動戦艦ナデシコ

↳ The Prince of darkness II ↳

―― 傀儡の見る夢――

— 未だ不明である —

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

第一話【幽霊ロボット『二機』】

(ユリカ……)

第八番ターミナルコロニー『シラヒメ』宙域。アキトはそこにいた。ネルガル諜報部がもたらした情報により、ユリカの所在が判明。敵に先手をうたせぬ為、迅速に作戦を開始した。ネルガルの情報操作により防衛戦力を分断。ユーチャリスの通信遮断による混乱に乗じて、ブラックサレナがボソンジャンプで侵入。テンカワ・ユリカの奪還を狙う。

作戦通り、戦力は薄い。思わず口の端を吊り上げるアキト。

瞬間、加速するブラックサレナ。その漆黒の鎧が宇宙の闇に溶け込み、立ち塞がるステルンクゲルを、デイストーションフィールドで蹴散らした。

《アキト》

ラピスからの通信。抑揚のない声と共に、目標ポイントがウインドウに表示される。

更に加速するブラックサレナ、目標付近へと突っ込む。

《フィールド出力最大》

響く轟音。フィールド任せで強引にコロニーの障壁を突破する。機体に走る衝撃、崩れ去る壁。

しかし既にユリカはそこにおらず、代わりに在ったのは七匹の鬼。

「……………」

迷いなくハンドカノンを発射するが、鬼達の跳躍はそれよりも早かった。七匹のボソンジャンプと同時に、シラヒメに仕掛けられていた爆弾が爆発する。

崩れ去る、コロニーシラヒメの中で佇むブラックサレナ。爆発により発生した炎が、その黒い機体を赤く照らしている。

ギリ、と奥歯を噛みしめるアキト。バイザーに隠れてその表情は読み取れない。顔を照らすは炎の色か、憎しみの色か。

《アキト、跳べる》

「……………ああ」

◆
シラヒメ宙域に再度ボソンアウトするブラックサレナ。

「ラピス、アカツキに伝言を。『作戦失敗』と」

《……了解》

静寂に包まれるブラックサレナのコックピット。アキトはただ呆然と前方を見つめる。

その視線の先、爆発を続けるシラヒメ。

(……ッ)

ドンッ!!

コンソールに拳を叩き付ける。その鈍い痛みが、また取り戻せなかったという現実をアキトに突きつけた。全身が、発光する。

ラピスからの通信が入る。

《地球連合宇宙軍第三艦隊の戦艦、アマリリス確認……墜とす?》

「いや、手は出さない」

帰投する、とラピスに伝えようと口を開いた、その時だった。

《前方、ボース粒子増大》

「……なに?」

身構えるアキト。目の前に形成されるジャンプフィールド。

徐々に「それ」が姿を現す。

(何だ……?)

その色、黄金。

完全に姿を現したその人型の機体は、なにをすることもなく、ただその場にいた。シラヒメの爆発に照らされたそれは、より一層光り輝いて見える。まるで宇宙に浮かぶ、星の一つのように。

——静寂。

何故なのか?

アキトの脳裏をふと懐かしい顔がよぎった。自身でもその疑問に

答えを出せず、一言呟く。

「お前なのか……?」

アキトの問いには答えず、黄金は再び跳んだ。

「! ……」

《アキト、アマリスが近い》

「ああ。今の機体の映像は?」

《ジャミングが酷い。ある程度なら解析できるところ》

「十分だ。帰投する」

漆黒もまた、その姿を闇に消した。

機動戦艦ナデシコ

↳ The Prince of darkness Ⅱ↳

— 傀儡の見る夢 —

第一話

【幽霊ロボット『二機』】

「『幽霊ロボット……ですか?』」

三人の声が重なる。

「そう。ひゅ〜どろどろ〜……の幽霊」

コウイチロウが手で幽霊の真似をしながら三人を見渡す。

苦笑するサブロウタとハーリー。

「ははは……はあ。あの、最近テレビでやってるやつですよ?」

ハーリーが気を利かせ、その場を取り繕う。

コウイチロウは腕を下げると、再び椅子に座った。

「そう。先日のシラヒメの襲撃事件、知ってるね?」

「はい」

ルリが頷く。

手を顎の前に組み、話し始めるコウイチロウ。

「そのとき丁度アオイ君も近くにいてね、シラヒメの負傷者の救助を

していた時、見たんだって…… 幽霊ロボット」

ただでさえ野太い声をさらに太くして言う。……怖い話風に。

「それも二体も」

「二体……ですか」

ルリは初めて聞く情報に首を傾げる。

「うむ。黒いロボットと金のロボットだったそうだ。黒い方は全高約八メートル程。単体でのボソソジャンプが可能で、なんかギザギザとしていたらしい」

「もう一方は？」

「単体でのボソソジャンプが可能」

「……それだけですか？」

「うむ。アオイ君の話によるとレーダーにもセンサーにも映らなかつたらしい」

「そんなことありえるんですか？」

「ちよう 強力なジャマーでも使っていれば、ありえなくはない」

やたらと「ちよう」を強調してルリに答える。

「……で？結局俺たちは、何をすればいいんでしょうか？」

ボケつと話を聞いていたサブロウタが、気怠そうに声を出す。連合宇宙軍総司令の前で、その態度はどうなのか。

「君たちにはこれまで襲われたコロニーを統括する、ヒサゴプランの中枢へ向かってもらいたい。シラヒメの事件の際に、ボソソの異常増大が確認されていたからね、その調査に向かって欲しい。周りのコロニーに影響が出たら大変だ」

「……で、ホントのところは？」

「見えないところで色々やっちゃってるみたいだから、ぜくんぶ情報盗んできて」

「了解しました！ガス漏れ検査つてことにしときましょう！」

先程とは打って変わって、気合の入った声で敬礼するサブロウタ。その笑顔は標的を見つけた、いたずらっ子のそれだ。すぐ横で、呆れた目をして見上げているハーリーの肩を叩く。

「……がんばれよハーリー」

「ええええ!? ボクがやるんですかあ〜!?!」

「そんなんあたりまえだろ」

「となると、目的の場所は……」

二人のやり取りが終わるのを確認してから、ルリが訪ねる。

「コウイチロウはもったいつけて一呼吸おき、そして三人に告げた。

「アマテラスだ」



「なんか変な任務ですねー、艦長」

三人で廊下を歩いてみると、ハーリーがそんなことを言い出した。

「なにが?」

「だって、いるかもわからない幽霊ロボットの調査ですよ? 別にボ

クrajやなくても……」

「いいじゃねーかハーリー、面白そうじゃねーかよ。ゴーストバス

ターズなんてよ」

「サブロウタさんは適當過ぎます!! だいたい……!」

いつも通りサブロウタにつつかかるハーリーと、いつも通りそれを

スルーするサブロウタ。

そんな二人のやり取りを、ルリは微笑ましく見つめていた。

(今日も二人は元気ですよ。明日また、宇宙に上がります。カイトさん)

宇宙に上がることをカイトに報告する。

あれから——ルリがカイトを失った日から——約二年が経った。

彼と過ごした日々よりずっと長い時が過ぎ、人も環境も全てが移り変わった。しかし、変わらないものもある。人の絆、そして想いだ。

この二年間、ルリが彼を想わない日は一日たりともなかった。十六歳に成長した今でも、はつきりと言えるのだ。

彼のことを愛している、と。

彼を想うだけで胸が高鳴る。嬉しくて、切なくて、悲しくて、でも心地いい。

「あれ？ 艦長なに笑ってるんですか？」

「……私、笑ってた？」

たとえば、二度と逢えないとしても。

「笑ってましたよ！ ボクがサブロウタさんにいじめられるのがそんなに面白いんですか!? 艦長ひどい！」

「まあまあ、落ち着けよハーリー」

「サブロウタさんのせいでしょう!？」

「宇宙に上る前にご飯食べに行きましょう」

「艦長の言うとおりでですよ！ ご飯を……って、ええ!? いきなり!？」

艦長話聞いていました!? ボク、サブロウタさんにいじめられてい
るんですよ!？」

「俺、中華の気分なんすけど、艦長はどうです？」

「サブロウタさんまで!? ……二人共、もう知りません!!」

ずんずん早足で先に進んでいくハーリー。

笑いを堪え、それを追いかけるサブロウタ。

(……あの二人が、今の私の家族です。カイトさん)

ルリはもう一度微笑むと、少しだけ歩くペースを上げた。



アキトが部屋に入ると、足を組みソファに腰掛けたスーツの男が出迎えた。男はテーブルの上に用意されていた熱いコーヒーを一口飲むと、余裕のある笑みを浮かべる。

「……座ったらどうだい？ 君はよくてもその子がかわいそうだろうか？」

入室してからずっと入り口に立ちつくしているアキトに声をかける。

『その子』とは、アキトの隣から動かない少女、ラピスラズリのことであろう。

「ああ」

アキトが座り、ラピスも座る。沈み込むその柔らかさが、ソファの高級さを伺わせた。その弾力に少し楽しそうなラピスを一瞥し、アキトは問う。

「話とはなんだ、アカツキ」

「ああ。遺跡ユニット……ユリカ君だけだね、見つかったよ」

部屋の主、アカツキ・ナガレはさらりとそんなことを言う。

一瞬の戸惑いの後、アキトのナノマシーンパターンがうつすらと輝く。

「どこだ」

「ヒサゴプランの中心、アマテラス……と、待ちたまえよテンカワ君」
場所を聞かないや、部屋を出て行くこうとする二人を引き止めるアカツキ。

「……なんだ」

「まだサレナとユーチャリスの調整は終わっていないよ」

「わかっている……少し、動きたいだけだ」

「やれやれ、そういうところは昔のままなんだけどねえ」

ふう、とため息をもらすアカツキ。

その様子をじっと見ていたアキトが訪ねる。

「ん？ どうしたんだい？」

「一つ、気になることがある」



一人部屋に残るアカツキ。コミュニケーションをONにする。

「エリナ君」

《はい、会長》

間髪いれず通信に答える辺り、流石は仕事の鬼、エリナである。

「作業の進み具合は？」

《大体は終わりました。しかし、ジャンプユニットに異常が見つかり思った以上に難航しています》

「了解。彼女の情報は？」

《依然、あれ以上の情報は入ってきていません》

「あーそう。じゃ、引き続き収集を頼むよ、有能な会長秘書さん」

《はいはい……おだてても何も出ないわよ。用はそれだけかしら？》

「いや、あともう一つ。こつちが本題」

《？》

アカツキの表情が険しくなる。

「『彼』の情報はどうだい？」

《……いえ、あの時から一切情報がありません》

エリナもまた表情を硬くし、報告を繰り返す。

「テンカワ君がシラヒメで彼らしき姿を確認したそうだ。ラピス君が情報を回してくれる」

《……》

「ホントかどうかはわからないけど、一応ね。……彼の情報ランクをSSSに」

《……了解しました》

コミュニケーションが切れると、前かがみになっていた体をソファに預けるアカツキ。深く深呼吸をする。

「さーて、アマテラス……どうなることやら」

テーブルの上のコーヒーは、既に冷めていた。



(暗い………(汗)はびっしょり)

戦っていた

闇の中、戦っていた

それは疾く、何者もその姿を捉えることが出来ない

色は、黄金

宇宙を切り裂く、一筋の雷

その閃光に触れたものは、戦艦だろうが人型だろうが砕け散った

阿鼻叫喚

人と鉄との亡骸の中心で、「彼」はつぶやいた

「わかったよ……イツキ……」

「!？」

バツ！

跳ねるように体を起こし、辺りを見渡す。

薄暗いが、いつもと何も変わらない部屋が視界に広がった。カーテンがふわりと舞い、優しい風と共に光が差し込む。

(ゆめ……?)

枕元に置いてあるお気に入りの猫の時計を見る。遠く、スズメの鳴き声が聞こえた。

(まだ五時)

「んん〜！」

両手を上に伸ばし、小さく伸びをする。朝、この瞬間は嫌いじゃない。ふと胸に手を当てると、パジャマが少し濡れている。汗をかいていることに気付くと、ベッドから降りてバスルームへ向かった。

パジャマを脱いで中に入ると、早速シャワーを浴び始める。

(きもちいい)

ひんやりとした水で汗をおとしながら、さつき見た夢を思い出してみた。

(なんか……イヤな夢だったな……)

シャワーを浴び終えバスタオルで体を包むと、鏡の前に座りドライ

ヤーで髪を乾かす。

(髪が長いから大変)

髪の短い人はちよつとは楽なのかな。そんなことを考える。

部屋に戻り、私服に着替えた。テキパキと必要なものだけをまとめると、時計を見る。

(まだ早いかな。あ、でもたまには外で朝食もいいかも)

髪を二つに結び、バッグを肩に提げて準備完了。靴を履き、もう一度部屋を見る。視線の先には白い帽子と、四人が映った写真。その写真の中の青年に、軽く微笑む。

(行つてきます、カイトさん)

ドアが開くと、陽光と気持ちのいい風がルリの頬を撫でる。目を細め、両手を太陽にかざすルリ。そのまま大きく深呼吸をする。

(そういうえば、さっきのイヤな夢。どんな夢だっけ)

部屋のロックを確認し、歩き出した頃には既にルリの興味は朝食に移っていた。



『アレ』の次の出撃、決まったんですってね？」

「うーん、決まったのはいいんだけどねえ……」

白衣の男が二人話している。広い空間だからか、声がよく響く。

「なにか問題でも？」

「彼は気分屋だからねえ、ちゃんと動いてくれるか……前回なんか何もしないで終わっちゃったし」

「大丈夫ですよ、今回は周りに有り余るくらいの『エサ』があるんですから」

「ま、やってみればわかるか」

「ええ」

そう言うと二人、ヤマサキ・ヨシオとその助手であるカトウ・シン

ジは、目の前に鎮座する黄金色の機体を見上げた。
「……にしても色、派手すぎませんか？」



ピッ！

狭いコックピットにウインドウが開く。

《貴様の次の任務が決まった。コロニアアマテラスでの宇宙軍、並びに統合軍の殲滅である》

ノイズ混じりの声が響いてくる

《我々の声明の後、単機で次元跳躍、戦闘行動を続けるものを排除しつつ……》

「はい」

《……遺跡を跳ばすまでの時間稼ぎをするのだ！ わかったな!?!》

「はい」

《……チツ、薄気味悪いガキだ》

「はい」

ウインドウが閉じる。

黄金色の機体の中、全身を無数のコードで繋がれたその男は、操り人形のようにになった自分の体を一瞥すると、

「……………」

ゆつくりと口の端を吊り上げた。

To Be Continued

第二話【Nightmare『Black』】

《ラピス、準備はいいか……》

「いつでもいいける」

《よし、もう一度確認する》

ネルガル重工地下ドック。低い音を響かせ起動するブラックサレナ。

その様子を、ユーチャリスの中から確認するラピス。

《俺が先にアマテラスに跳ぶ。そこで足の速い機動兵器を引きつけ、一旦引く》

「……」

《このタイミングでお前は敵の懐へ跳び、鈍亀どもを一掃してくれ》
「わかった」

《俺はそれに合わせて再突入する》

「ん」

《よし、いい子だ》

「……」

いい子、という言葉にラピスの頬が少し緩む。

《それにはまず……》

「うん。アマテラス、コネクト」

アマテラスへのハッキングを開始するラピス。その顔に幾重にも分かれた光がはしる。ユーチャリスのシステムとネルガルのバックアップをフルに利用し、次々とセキュリティブロックを突破。システムの深層に辿り着く。

「ここはけっこう頑丈。でも、どんなに厚い壁でも隙間はある。だから」

ウインドウ越し、アキトの顔を見つめる。

「アキト、呼びかけて。きつと答える」

《……ああ》

アキトの顔が薄く発光する。きつと色々な想いが巡っているのだろう。恨み、辛み、憎しみ。そして、『愛しさ』も。

一度だけ、アキトの部屋で見たことのある『彼女』の姿に思いを馳せる。

(……ゆりか)

確か、そんな名前だった。

アキトの部屋で見たのは、アキトとユリカと、あと二人……四人が並んだ写真。ラピスは何故かその写真に懐かしさを覚え、鮮明に記憶していた。写真の中の『彼女』は、四人の中でも一際楽しそうに笑っていた。

《隙間を発見》

ネルガルのバックアップから報告が入る。遠くへ旅立とうとしていた意識を戻し、すかさずアマテラスのシステムに侵入するラピス。ユリカの『意識』にハッキングを仕掛ける。

瞬間、溢れだした『想い』がウィンドウとなり、ラピスの周りを囲む。

(OTIKA……AKITO。そう)

ハッキングの成功と同時に、ブラックサレナのボソンジャンプカウントが始まる。俄に騒がしくなるドック。

「アキト」

《先に行く、後詰を頼む》

「アキト」

《……?》

「死なないで。『彼女』が悲しむ」

《……ああ》

漆黒は答え、ボソンの光を残して消えた。

機動戦艦ナデシコ

〈The Prince of darkness Ⅱ〉

— 傀儡の見る夢 —

第二話

【Nightmare Black】

「システム復旧はまだか!! 早くしろ!! こんなところ敵に襲われたらどうするつもりだ!!!」

返答を無視し、机をぶつ叩き、一方的に内線を切る。

アマテラス司令室。その部屋でアズマ准将がイラついているのは、二つの理由があった。

一つは事故調査と称して探りを入れてきた宇宙軍の小娘。いや、こちらはもうどうでもいいのだ。問題はもう一方。

「オチカとは何なのだ全く!」

『OTIKA』

そう表示されたウインドウがアマテラス内部を埋め尽くしている。システムの故障なのか、敵のハッキングなのか。とにかく大量のそれにより、アマテラスのシステムのほとんどが停止してしまっていた。

「ぬうううう……!! 今日は何日だ!!」

そしてもう一度机を叩くと、先ほどまで食べていた煎餅の入った容器をひっくり返し、鼻息荒く部屋を出て行った。



「落ち着いて! みなさん落ち着いてください!」

「……ハーリー君、ドジツた?」

「二列に並んでください!」

周りに浮かぶウインドウ、それにじやれて遊ぶ子供たちとそれを注意する引率の女性を見ながらルリはつぶやいた。

「ほら、静かに!」

《僕じゃないです! アマテラスのコンピュータ同士のけんかです!》

「静かにせんかア!! 落ち着けオラア!!!」

「けんか?」

「……さあ、ならんでくださいねえ」

《そうなんです！そうなんですよお！》

女性の剣幕に驚き、素直に二列に並ぶ子供たち。ウインドウに写る文字を見つめるルリ。

《アマテラスには非公式なシステムが存在します》

ハーリーの話を聞きながら、文字をじつと見る。何か引つかかる。

(OTIKA……)

《今の騒ぎはまるでそいつが自分の存在をみんなに教えてると言うか、たんにケラケラ笑ってるっていうか……》

(AKITO……!?)

言い表せない予感にブワと鳥肌が立ち、ルリは走り出した。



「あ…艦長！ どこ行くんですか!? 艦長ー！ 待ってください！
かくんちよおお！」

ナデシコB艦橋。突然走り出したルリを追いかけるハーリー。と
いっても本人は座っているだけで、追いかけているのはコミュニケーションの
ウインドウだ。

「艦長！ ちょっと待ってください！ どこ行くんですかあ〜!?!」

《ナデシコに戻ります》

「え?」

《敵が来ますよ》

「え?」

ウインドウにへばりつき、器用にルリの背中を追いかけるハー
リー。

それを隣で見ているサブロウタ。

(すげえ、どうやってんだコイツ……これも愛のなせる業なのか)

などとくだらないことを考えていたが、オペレーターが告げた言葉で我に返った。

「ボース粒子の増大反応です!!」

「なに!? マジかよ!!」

「ほ、ホントに来た……幽霊!?!」

ナゲシコB、響く警報。



宇宙に一機の機動兵器が姿を現す。

その色、漆黒。

「ラピス、これから行動に移る。状況の報告を頼む」

《わかった》

まだ遠くに見えるアマテラス。ユリカの奪還。奴等への復讐。その甘美な響きがアキトの口元を歪ませる。

加速するブラックサレナ。

《フィールド出力最大。まだ加速できる》

凄まじいスピードで迎撃ミサイルを潜り抜け、一息にアマテラスに接近する。

(まずは一番厄介な奴らを引き付ける)

途中、ステルンクーゲルの部隊と交戦、撃破。

純正、そして上級のエステバリスパイロットにとって、IFSを使用せず、僅かに機体に命令が遅れるステルンクーゲルなど敵ではない。

(違う……違う……そこか!)

アキトの予測に一步遅れて、レーダーに十二機の敵影が突如表示される。

十一機のエステバリスII……そして、一機の赤いエステバリスカスタム。

(ステルスシートか)

敵の数、機体、武器射程、そして『スバル・リョーコ』の存在。O
Sが出した結論は『回避』。

(もとよりそのつもりだ……！)

急旋回、コロニー外部へと一気に遠ざかる。この間、コンマ一秒。
アキトは、およそ尋常ではない速度でその場を切り替えしてみせた。
しかしこの時、スバル・リョーコはそれを超える素晴らしい反応を
見せつける。

ブラックサレナ、被弾。

エステバリスカスタムが放ったレールガンが直撃する。コック
ピットに衝撃、フィールド出力低下。

(相変わらず流石……だが！)

ブラックサレナ、アマテラス第二ライン上まで後退。追撃してくる
エステバリス、ステルンクーゲル部隊。

(作戦通りだ)

「……ラピス!!」

アキトの声と同時にアマテラスの懐、守備隊側面にグラビティブラ
スト。多数の爆炎が巻き起こり、ユーチャリスがその姿を現す。それ
により、追撃してきた機動兵器部隊の動きが一瞬止まる。

(よし、突入する！)

アキトは再度加速した。

愛しい人のもとへ。



カツカツと、長い廊下に複数の足音が響く。

「今度はジャンプする戦艦かい?」

ヤマサキはスーツの上に白衣を羽織ながら、隣にいるカトウに視線

を向けた。ヤマサキに訪ねるカトウ。

「ネルガルでしょうか？」

「さあ？連中は？」

「5分で行く……と」

カトウとは逆隣にいた黒服が答える。

「はあ、大変だあ」

小さな音を立て、研究室の扉が開く。その部屋にヤマサキの音が響き渡った。

「緊急発令！ 五分で撤収ウ！」

一瞬の沈黙の後、慌ただしくなる室内。

上げていた右手を下ろし、カトウに耳打ちする。

『彼』……もうイけるよねえ」

「はい、声明があればいつでも」

《!! 十三番ゲート、遺跡専用搬入口オープン!! 敵のハッキングです!!》

「あくらら……見つかっちゃったみたいだねえ」

「シンジヨウ中佐より打電！ プラン乙発動!!」

「いよいよですね……ヤマサキ博士」

「うーん、楽しくなってきた」

目の前のディスプレイにシンジヨウの姿が映し出される。

《地球の敵、木連の敵、宇宙のあらゆる腐敗の敵……》

統合軍の制服を剥ぎ取ると、下から別の服が現れる。

《我々は、火星の後継者だ!》

そして、火星の後継者は動き出した。



巨大な対極紋の壁。アキトの行く手を阻むように聳え立つ。

(……)

静かに壁のコントローलハッチに近付き、パスワード解析を試みる。その瞬間、赤いエステバリスが天井を突き破り侵入、ワイヤー伝いに強制通信を行ってきた。開くウインドウ。

《オレは頼まれただけでね、この子が話をしたいんだとき》

《こんにちは。私は連合宇宙軍少佐、ホシノ・ルリです》

目の前に懐かしい顔が二つ浮かび上がる。身体の発光をこらえ、ラピスに指示を出した。

《あの、教えてください。あなたは、誰ですか？あなたは……》

「ラピス、パスワード解析」

ラピスの導き出したパスワードは『SNOW WHITE』。白雪姫は待っていたのだ。王子のキスによって目覚める日を。

大きな音を立てて壁が開く。

「時間がない。見るのは勝手だ」

そう、時間はない。奴らが来る前にユリカを奪還しなければならぬ。

《!! なに!?!》

リョーコのエステバリスが壁の中へと飛び込んでゆく。

(できるなら……君たちを巻き込みたくなかった)

そこにあつたのは、あの遺跡ユニットと初代ナデシコ。そして……

《これじゃあいつらがうかばねーよ……》

《リョーコさん……》

《なんでこいつらがこんなところにあるんだよ……》

リョーコの悲痛な声が、ブラックサレナのコックピットに響く。アキトが口を開こうとした、その時。

《それは！ 人類の未来の為!!》

二機の機動兵器と遺跡ユニットを挟むように巨大なウインドウが開く。そこに映った人物。

その男の名、クサカベ・ハルキ。

《クサカベ……中将!?》

そう洩らしたリョーコの右にジャンプフィールドが形成される！

《アキト、あいつらが来る》

「！ リョーコちゃん！ 右イ！」

《な！ うわ！ あっ！ ああああ!!》

突如姿を現した鬼達の機体、六連。その奇襲にリョーコは翻弄される。

「ちっ！」

即座にブースターを起動するブラックサレナ。六連に突っ込み、リョーコのエステバリスから引き離す。しかし間髪入れず、第二・第三の鬼が現れる。接近戦は不利と判断、距離をとりハンドカノンを放つ。体勢を崩す六連。アキトはその隙を見逃さず追撃、鬼の一匹にダメージを与える。

《アキト、上》

ラピスの声に反応。大雑把にスラストを吹かし、瞬時にその場を離脱、さらに真下に向かって射撃を行う。一步遅れてアキトのいた場所を通過する六連。そのまま吸い込まれるように、先ほど真下に放たれたカノン砲に着弾する。更に攻めてくる六連の攻撃を紙一重でかわしつつ、牽制射撃。リョーコのエステバリスをかばうように着地する。

「お前は関係ない、早く逃げろ」

《今やってるよ!》

リョーコがエステバリスの破損部分をパージした瞬間、突然辺りに大きな爆発音が響き渡った。

《な、なんだあ!?!》

遠くで次々と起こる爆発。増える轟音。

(アマテラスを放棄する気か……!?)

しやらん、と。

その爆発に紛れ、この場にはまるで不釣り合いな透き通った音が響く。遺跡ユニットの真上に開くジャンプフィールド。その周りに次々と集まる六連。

そして。

『一夜にて、天津国まで伸び行くは。瓢の如き宇宙の螺旋』

「奴」が、姿を現す。赤い衣をまとった「鬼神」が。

鬼神は爬虫類のような瞳をギラつかせ、アキトに問いかける。

《女の前で死ぬか?》

「!!!」

その光景を見た瞬間、アキトの体のありとあらゆる箇所が発光した。

目の前で花開く遺跡、その中心に「彼女」はいた。

ずっと探し続けた、愛しい女が。

《アキトお!! アキトなんだろ!?! だからリョーコちゃんって……おい!!!》

リョーコの声が響く。答えたくなる気持ちを抑え、鬼神『北辰』の機体、『夜天光』を睨みつける。

《滅》

北辰の声と同時に再び襲い来る六連。その瞬間天井が爆発し、これ以上ないタイミングでサブローウタのスーパーエステバリスが突入する。そのまま素早くリョーコの機体を回収すると、爆炎の向こうへと消えてゆく。

(よし……)

このブロックを巻き込む爆発はすぐそこまで来ている。そんな中激突する、漆黒と、鬼神達。一対七、多勢に無勢。しかし、この圧倒的不利な状況にして、アキトの感覚は限界まで研ぎ澄まされていた。そこにラピスの戦闘補助・ブラックサレナのスペックが手伝い、互角の戦いを演じる。

「ユリカを返してもらおう」

《ククク……》

「……」

《いいのか? こんなところについて》

「なに……?」

《女に執着しすぎたな、それが同胞を殺すことになる》

「……!?!」

六連が攻撃を止め、夜天光の後ろに下がる。爆炎の中、真正面に対峙するアキトと北辰。

《人形は踊り出す。操りの糸と、黄金の鎧を纏い》

「なにを言っている!!」

北辰の顔が醜く歪んだ。

《ゆけよ傀儡、ミカズチ》



《ばかばか!! 引き返せ!! ユリカと、アキトが!!》

《艦長命令だ、わりいな》

《ルリー!! 応答しろー!! 聞いてんだろ!! 見てんだろ!!!》

アマテラスを脱出したサブロウタ。青い機体の腕には、半壊したリョーコのエステバリスが抱きかかえられている。

ルリーの戻ったナデシコBに、リョーコの叫びが響く。

《生きてたんだよあいつら! 生きてたんだよルリー!! 今度も見殺しかよ……ちくしょう……畜生!!》

戻りたい。

戻って確かめたい。

本当にアキトなのか、ユリカなのか。その気持ちはルリも同じだ。でもそれ以上に、クルーと収容している避難者の命を危険にさらすわけにはいかなかった。

ルリは、ナデシコBの艦長なのだから。

目を閉じて深呼吸。そして指示を出した、その時だった。

「……戦闘モード解除」

「!? 前方、ボース粒子の増大反応!!」

「!?」

「リーダー・センサー・その他諸々反応なし!! 識別不能! 相手、応答ありません!!」

「ええええ〜!? またですかあ〜!?」

オペレーターの声、ハーリーの声、様々な声がブリッジに響く。

「ボソン反応消失!! 相手の反応、完全に消え去りました!!」

「スキャン開始! だめです! やはり反応ありません! セン

サー、切り替えます!」

「まさか、もう一体の……」

「……幽霊……?」

ルリのつぶやきは、とたんに慌ただしくなったブリッジの喧騒に飲み込まれた。

(カイトさん……)

何故かはわからないが。

あの青年の笑顔がルリの頭に浮かんで、消えた。

To Be Continued

第三話【Shiver『Gold』】

「護衛艦サイネリア、ムスカリ、共に沈黙!!」

「ステルンクーゲル部隊、第一、第二、第四小隊全滅!! だめです!!
押し切られる!!」

アマテラス防衛部隊旗艦「デンドロビウム」。そのブリッジが混乱に包まれる。

無理もない。統合軍、ヒサゴプランが誇るアマテラス防衛部隊のもう半数が撃破されているのだ。

「護衛艦ベゴニア撃沈!!」

「護衛のステルンクーゲル部隊、全滅!! 残りは後継者側のものです!!」

「っ……!! 先ほどの黒い機体ではないのか!」

「わかりません!!」

オペレーターはかつてない事態に混乱し、頭を横に振る。他のクルーも同じだ。なんとかこの場を凌ごうと必死になる者、諦め絶望し、自暴自棄になる者。逃げ出そうとする者。様相は様々だが、彼らの頭に浮かぶことは一つだった。

『死』

「後継者の機体か!!」

今、アマテラスの残存部隊は壊滅させられようとしていた。突如ボソンアウトしてきた機体、たった一機に。

「敵、こちらに向かってきます!!」

「なに?」

弾幕を安々と突破したそれは、ブリッジの真正面で停止した。

その色、黄金。

「敵、強制通信! 音声出ます!!」

ブリッジにいる者、いや、艦内にいる者全員が降伏を覚悟しその言葉を待った。しかし、紡がれたのは未来ではなく。

《さようなら》

宇宙を行くその黄金は、流星のようにも、雷のようにも見えた。

機動戦艦ナデシコ

∫ The Prince of darkness ∩ ∫

— 傀儡の見る夢 —

第二話

【 Shiver 『Gold』】

「旗艦デンドロビューム撃沈!!」

「そんな……!」

「……」

皆言葉を失っていた。

旗艦デンドロビュームの撃沈。それはアマテラス防衛部隊の事実上壊滅を表していたからだ。彼らとて無能ではない。いや、有能であるからこそ艦を任せられ、パイロットを任せられる。その彼らが、いとも簡単に墮とされた。二匹目の幽霊、その得体の知れない「モノ」に。

艦内を沈黙が支配しようとした時、ルリが口を開いた。

「ナデシコB、戦線を離脱します」

「え? 助けには行かないんですか?」

「だめ。敵の正体がわからない以上、ミイラ取りがミイラになる可能性があります」

「了解!」

「ナデシコBは、今収容している負傷者・避難者の安全を最優先します」

冷静に、落ち着いた声で皆を先導する。

「ナデシコB、タカスギ機回収後に宙域を離脱。チューリップを通り、安全圏まで避難します」

「了解!!」

ルリの言葉に、皆が各々の作業を始める。その動きに迷いはない。「サブロウタさん! 聞きましたか!? 早く帰艦してください!」

《声でけえなハーリー。聞こえてる聞こえてる！ 焦らせんなよ、こっちはもう一人背負ってるんだから……》

「!? 敵反応!! レーダー、センサー捕捉しました!!」

「《え、?》」



轟音が響き渡り、壁が崩れ去る。爆発が巻き起こり、飛び散ったデブリが機体をかすめる。真つ当な神経の持ち主であれば、なりふり構わず即座に避難をするであろう。そんな状況の中対峙する、鬼と復讐人。

「ククク……あれが堕ちるのは時間の問題。女を取るか、彼奴らを取るか」

《……っ!!!》

恨みがましそうにボソンの光を纏い、闇に消えるアキト。

その様子をただ見つめ、嘲笑する北辰。

《隊長、準備が整いましてございます。我々も》

「うむ」

遺跡ユニットの周りに取り付く六連と夜天光。光が集まる。

「哀れよな、テンカワ・アキト。そして……」

光は消えた。「彼女」と共に。



「敵所属不明!! 人型、金色の機体です!!」

「金色!」

《間違いねえ! もう一匹の幽霊だ!!》

「かまいません、早く帰還してくださいサブロウタさん」

「……！ 敵、一直線に当艦に接近!! 目視確認圏内!!」

「えええく!? ど、どこに!？」

オペレーターの声に、キョロキョロと周りを見渡すハーリー。目の前に大きくサブロウタのウインドウが開く!

《バカ野郎! 真下だ!!》

瞬間、ブリッジに衝撃。皆とつさに機器にしがみつく。

「わああああ!!」

「つ……被害状況を確認……」

ルリは指示を出そうと顔を上げた。その目に飛び込んできたもの。黄金に輝く機体、その手に掴まれた、上半身だけの青いエステバリス。

《く……》

《てめー!! 大丈夫か!? オレを庇ったりするから……!!》

リョーコの叫びが聞こえる。サブロウタの応答はない。

「あ……て、敵パイロットからの強制通信! 音声、入ります!」

(!オモイカネ)

ルリは瞬時にオモイカネと連携し、強制通信の侵入路から敵機体に逆侵入。敵機体の掌握を試みる。

そして、その声は聞こえた。

《これが宇宙軍最強の戦艦?……期待ハズレだね》

「!!!」

ドクンと。

ルリの心臓が、大きく一回鳴った。

ふと、誰かの声がルリの頭をよぎる。

—— 僕はもうナデシコには戻れない ——

ドクン。ドクン。

心臓の音は止まらない。体が揺れているのではないかと錯覚するほどの強い鼓動だった。

いつかどこかで聞いたその声に体中の血が沸騰し、頬は勝手に紅潮する。

体温が上がり、呼吸は乱れる。瞳孔が大きく開き、潤んだ瞳は絶え

ず揺れる。ひどく喉が渇き、唇は震える。耳は『彼』の声だけを聞き取ろうと、周りの音を遠ざけていた。

先ほどまで事態を打開しようとは皆を先導していた『ナデシコB艦長、ホシノ・ルリ』は、もうそこにはいなかった。

《まあ、あんた達で最後だ。少し、もの足りないけど》

—— ルリちゃんは、僕の大切な思い出になりそうだよ ——

『黄金』の声に『彼』の声が混ざる。

もつと声を聞かせて欲しいと、全神経を集中するルリ。しかし、黄金が紡いだ言葉は。

《さようなら》

言葉と同時に、ナデシコBの真正面で起こる爆発。ブリッジの誰もが死を覚悟した。

しかし、いつまでたつても死は訪れず、変わりに聞こえてきたのは、声。

《……お前だけは》

急な攻撃を受け、一瞬ひるむ黄金。

《チッ！ 次元跳躍か！》

黄金の視線の先、姿を現すブラックサレナ。

「え……あれはさっきの!?!」

《アキト！》

「……!」

サレナが姿を現すと同時に敵システム表層部の掌握が完了。

ナデシコを庇うように黄金の前に立ちふさがるブラックサレナ。

「敵コックピットのウインドウを開きますか、ルリさん」

オモイカネにうなずいて答えるルリ。

そして、アキトは叫んだ。

《お前だけはこの子を傷つけちゃだめだ!》

ヴン!!

同時に、大きくブリッジに映し出される敵コックピット。

そこに映ったのは……

(カイト……さん)



ゴオオオオン!!

大きな衝撃がナデシコBに走る。ブリッジで悲鳴が重なる。

「!!つ敵、グラビティブラスト……!!? フィールド、貫かれました!」

「左舷被弾! フィールドユニット破損! 出力低下ア!!」

「ミサイルも数発着弾確認!!」

「フィールド出力低下! 危険です!」

「整備班がユニットへの移動許可を求めています!」

「!? 避難民の中に混乱が生じているようです!! 艦長、指示を!!」

「艦長……艦長!? どうしたんですかあ!! しっかりして下さい!

かんちよお!!」

目を見開いたまま動かないルリ。ハーリーの言葉がむなしく響き渡る。

《やめろカイト!》

ハンドカノン捨て、黄金に取り付こうと急接近するブラックサレナ。しかしその腕は空振り、距離をとられる。

《危ないな、ナデシコを墜としたりすぐ相手するから待つてなよ》

《その艦にはルリちゃんが乗っているんだ……!》

《あのさあ、オレの話聞いている?》

《カイト!》

《だからさ……》

《ナデシコにはルリちゃんが……!!》

《あーもう! うるさい! 知らないよそんな奴!!》

「艦長!!」

必死に呼びかけるハーリー。ルリからの答えはない。

ナデシコBの混乱は増してゆく。

「かんちよう！ ……あ！ サブロウタさん！ 大丈夫ですか!? サ
ブロウタさん!!」

《気絶してるみてーだ!! 何とか近くまで行くから、回収してくれ!!
そんなくらい出来んだろ!?》

「は、はい!!」

リョーコの声に応えるハリー。急いで格納庫に通信を入れる。

(ボクがすっかりしなくちゃ!)

「こちらブリッジ！ タカスギ機の回収お願いします！ ハッチの開
放を……」

「敵両肩に再び重力波反応!!」

「ええええー!?」

黄金の両肩の砲が鈍く輝く。

《碎け散れ!!》

《っ!!》

爆発が起こる。しかしそれはナデシコBから起こったものではな
かった。

ブラックサレナが取り付く前に、黄金の両肩の砲が碎け散る。その
残骸に包まれる機体。

《チッ!! 二発はもたないか!》

《! ラピス、ヤツに取り付いて跳ぶ! とにかく遠くに……!》

黄金の動きが止まった一瞬、アキトは再度ブースターを吹かし接近
を試みる。

《マキビ少尉! こちらドック、エステバリス二機回収しました!! 何
とかしてやりましたよ!》

「ありがとうございます!」

《あと、降りてきた女性がエステバリスをよこせと……》

「はあ!？」

《つべこべ言ってねーで早くエステを貸せ!!》

「わああ!!」

ブリッジ一杯、大きく開くりョーコのウインドウ。仰け反るハ
リー。

《エステのあまりくらいいあんだろ!? 早くしろ!》
「サブロウタさんの一機しか積んでませんよおお!!」
《なに!!!》



黄金に取り付く為、爆風に飛び込むブラックサレナ。
相手の正体が判り、動揺していたからだろうか。「その可能性」が一瞬アキトの頭から抜け落ちていた。

(いない!? ボソン……!)

理解したときにはもう遅かった。

コックピットに衝撃。真後ろにジャンプアウトした黄金は、その巨大な爪でブラックサレナのブースターを丸ごともぎ取っていた。大破するブラックサレナ。その漆黒の鎧が宇宙に飛び散る。生きているバーニアで姿勢制御を行うが、思うように動かない。

「……ッ!!」

もがく漆黒の前で、悠々とナデシコへと近づく黄金。
必死にアキトは叫ぶ。

「やめろカイト! ルリちゃん、逃げろ!!」

《ホントうるさいなあ……ナデシコ墜としてからゆっくり相手するか
らさ、待っててよ》

アキトの声はむなしく響き、その目の前でナデシコBのフィールド
が消失する。

その様子を見たアキトの体中が発光する。

(ラピス、ナデシコBの前にジャンプする……!)

(ダメ。きつと今の機体じゃ次のジャンプが限界。跳んでただ無駄死
にするだけ。「彼女」を奪還する為には、ここで死ぬわけにはいかな
い)

(ユリカを救っても、あの子達がいなければ意味がない!!)

《さあ、これで終わりだ》

アキトが行動を起こす前に、黄金の音が響く。

《さようなら》

その爪が、ナデシコBブリッジに振り下ろされた。



《さあ、これで終わりだ》

ナデシコBのブリッジに、黄金を駆る男の音が響き渡る。

ハーリーはその声を、どこか現実味なく聞いていた。

艦内各セクションからの悲鳴にも似た被害報告は、止むことのない嵐のように続いている。ハーリーの周りにも、小さなウインドウが無数に開き続ける。しかしそんな艦内の喧騒とは裏腹に、嵐の中心であるブリッジは静まり返っていた。クルーは誰一人として声を出さない……いや、出せないのか。目の前で起きていることを、まるで映画館にいるかのように見つめていた。

近づいて来る黄金の機体。その爪を振りかぶる。ふと彼女を見ると、唇が微かに動いていた。震えているのだろうか？雪のように白い肌の彼女は、こんなときでも美しかった。

ふと涙があふれた。死ぬのが怖いからだろうか？それは判らないが、（艦長と一緒になら、いいかな）と、そう思った。

《さようなら》

男が別れを意味する言葉を発する。その瞬間、彼女の唇がはつきりと動いた。

「カイトさん!!」

凜とした声が、艦橋に響く。

確かな殺意を持って振り下ろされた死の爪は、その響きに抑えられなかったようにナデシコBの喉元で静止した。

そして、その声は聞こえた。確かに。ハッキリと。自分たちを殺そ

うとした、目の前の見知らぬパイロットの口から。

《ルリ、ちゃん?》

ルリの身体が、ビクツと震えた。

《ぐっ……! うああああああ!!》

男は突如頭を抱えて叫び出し、黄金の機体は痙攣したような奇妙な動きをはじめ、ナデシコBから大きく距離をとった。

突然のことに、誰も声を出せない。先ほど男の名を呼んだ、ルリでさえも。

《頭がっ……! 女、何をした! 畜生!! 頭が割れそうだっ!!》

ウインドウに映る男の顔に幾重もの光が走る。目は大きく見開かれ、視線は忙しなく動き、体はがくがくと震えている。誰が見ても異常な光景だった。

《オレは……僕は……だれだ? 君は……?》

《君は カズチ。火星の後 者のパイロット だよ》

男のコックピットからノイズ交じりの音声が届いてきた。その声は繰り返す。ゆつくりと、諭すように。

《君はミカズチ。火星の後継者のパイロットだよ》

《オレは、ミカズチ……火星の後継者の、パイロット》

呆けたように言われたことを繰り返す男。体から力が抜け、その目から生気が消えてゆく様だった。

《カイト! お前はカイトだ! ミカズチなんて名前じゃない!!》

アキトと呼ばれていた黒衣のパイロットが、男に向かって叫んでいる。しかし男には聞こえていないようだった。目の焦点は合わず、ぶつぶつと何かを呟いている。

ハーリーも、ブリッジのクルーも、おそらく黒衣のパイロットでさえも、男の次の言動を待っていた。待つことしかできなかった。未だこの場を支配しているのは、黄金の機体に乗ったその男だったのだ。



ルリは叫んでいた。

精一杯、力いっぱい叫んでいた。

伝えたいことがある、届けたい思いがある。

しかし、極度の緊張と疲労、激しすぎる胸の鼓動、カラカラに乾いた喉がそれを許さない。

ついにルリの想いは言葉にはならなかった。

ノイズ交じりの声は続ける。

《さ、君はだれだい？》

《僕は……》

ルリの目の前で、カイトの目に光が戻る。その瞳に映るのは「ルリ」か、それとも。

《オレは……火星の後継者のパイロット、カザマ・ミカズチ……》

《よくできました》

カイトの瞳に怒りが宿り、ルリの顔に絶望が浮かぶ。

《ふぎけやがって！ このっ……!!》

《おっと、今日はここまで》

《博士！ 邪魔するなよ！ こいつら!!》

《君は自分が思う以上に疲労してる。それに宇宙軍の応援が来ちゃったみたいだしねえ》

カイト側の通信で、味方の増援が近づいていることに気付くナデシコB。レーダーに次々と映る宇宙軍の戦艦が、真っ直ぐにこちらに向かってきている。

《っく!!! 女あ!!》

カイトの視線がルリに向くと、それだけで彼女の心臓は喜びに大きく跳ねた。

その視線に込められているものが、愛しい者に向けるそれではなく。

《次は、殺してやる》

憎しみだとしても。

ト、なのか?》

リョーコの問いには答えられなかった。でも、僅かに動くようになった唇、喉の奥から、一番伝えたかった言葉が溢れ出した。

誰にも聞き取れないほど、小さな声で。

もう流さないと誓った、涙と共に。

「あいたかったです……カイトさん……!」

To Be Continued

第四話【アイツの『名前』】

暗い……くらい

ここはどこ？

ふわふわして

暖かくて

「……ちゃん。……りちゃん！」

なんだろう？ 何か聞こえる……

「ルリちゃん！ おーい、ルリちゃん」

え？

「どうしたの、ルリちゃん」

カイト、さん？

「そんな幽霊でも見るような目して、僕のこと忘れちゃった？」

そんなはずがない

忘れるはずがない

忘れられるはずがない

あなたがいない世界

永遠にも思える三年間

あなたを想い続けてきたのだから

あなたの声

あなたの髪

あなたの瞳

信じられないくらい

全てあの時のまま……

涙があふれる。頭が真っ白になる。胸が締め付けられる

苦しい……！ 苦しい……！ 苦しい……！ 嬉しい！

「ルリちゃん」

今すぐあなたに抱きつきたい

頭をなでて欲しい

「今までよくがんばった」と、褒めて欲しい

山ほど伝えたいことがある

ユキナさんと仲良くなったこと

ミナトさんに料理を教わったこと

一人暮らしをはじめたこと

お気に入りのマグカップのこと

頼もしい仲間ができたこと

だけど、身体が動かない。動いてくれない

自分の身体が自分のものじゃないみたいな感覚

緊張で、喉はカラカラに渴いて

手足はなぜか、小さく震えて

言わなくちゃ……言わなくちゃ……!!

「あいた、かったです」

言えた……!

「あいたかったです、カイトさん」

あなたが目の前にいる。それだけで、想い続けた時が報われた気がした

あなたが生きていてくれる。それだけで、恋焦がれた時が報われた気がした

「僕もだよ。また逢えて、すごく嬉しいよ」

「わたしも……! わたしもです」

涙がどんどんあふれて止まらない

カイトさんの姿が涙で見えなくなるのがイヤで、両手の項で目じりをぬぐう

「わたしも、あえてうれしいです……」

「ルリちゃん」

体中にカイトさんのぬくもりを感じる

抱きしめられている

「ルリちゃんは泣き虫だね。そんな子にはお仕置きだよ」

カイトさんの体が離れて

かわりに顔が近づいて

私は目を閉じて

そこに全神経を集中させた

「……」

でも、いつまで待ってもその感触は来ない
かわりに気配がしたのは耳元
どうして……？

「ルリ」

「あ……」

耳に優しく息がかかる

そして……

愛しい人の、声が聞こえた

「殺してやる」

機動戦艦ナデシコ

↳ The Prince of darkness II ↳

— 傀儡の見る夢 —

第四話

「アイツの『名前』」

「っ！」

自分の声で目が覚める。

ゆつくりと体を起こし、軽く頭を振る。周りを見渡すと、そこは一面白色で統一された部屋であった。いつもと違うベッドと枕元のポタン。そして腕に通っている管が、ここは病院だとルリに理解させた。

カーテンが下りた薄暗い部屋の中、壁の時計を見る。時刻はAM 9:00。

コン、コン。

ドアが叩かれる。叩いた主は、返事はないものと思い込んでいたの

か、ルリが答える前に部屋に入ってきた。

そして、上半身だけ起こしたルリと目が合う。

「……」

「……」

「……どうも」

「あ、うん。こちらこそ……じゃなくて！ やっと起きたんだ」

ノックの主、白鳥ユキナは持っていたカバンを下ろした。

「よかった〜！ま、とりあえず……ちよつと暗いから明かり入れるね
〜」

お日様こんにちは〜！、とカーテンを開け放つユキナ。

部屋に差し込む陽光。その柔らかな光に照らされたルリは、少し目を細めた。

それに気付いたユキナは、カーテンを半分だけ閉める。

「どうも」

「ん」

満足そうに頷くユキナ。しかしその表情はすぐに驚きに変わり、パチパチと目を瞬いてその顔をルリに近づけた。

「？ ルリ、泣いてたの？」

そのユキナの一言で、ルリは初めて自分の頬が濡れていることに気付く。

「いえ」

「ふうん……」

ユキナはベッドの隣にあつた椅子に腰掛け、話し始めた。

「なんかアンタ、気絶してここに運び込まれたんだって」

「気絶、ですか」

「うん。詳しくは機密だなんだで教えてもらえなかったけど、極度の緊張で疲れが一時に出たんじゃないかって」

ルリは空ろな記憶を辿る。確かにアマテラス宙域の攻防の後、宇宙軍の増援が到着した辺りから記憶が曖昧だ。

「別に怪我とかなかったからとりあえず様子見よう、ってことになったんだって。それから丸一日ぐっすり眠ってたのよ」

ルリが運び込まれたって聞いたときはビックリしたよ、と微笑んで話すユキナ。

「みんなお見舞いに行くってうるさかったんだけど、病院に大勢で行くのは非常識だ、ってミナトさんがね。で、あたし代表」

自分を指差し、につ、と白い歯を見せるユキナ。その笑顔に、ルリの少し気分が落ち着いてくる。

「でも、どうやらあたしが一番乗りじゃなかったみたいね」

と、テーブルの上の花瓶に生けられた……というか、生けられないほど大量の花と、ピラミッド型に重ねられた巨大な果物の山に目を向ける。呆れた表情をしているが、口元は笑っていた。

「よかった、軍にもいいお友達がいるみたいで」

「はい」

まるで自分のことのように嬉しそうに呟くユキナ。その様子を見てルリは、この人と友達でよかったとあらためて思う。

「にしても気絶ってアンタ。なにをしたの？ 頭でも打った？ どれどれ〜？」

ベッドに乗り、両手でルリの頭を無遠慮に撫で回すユキナ。ルリは少し迷惑そうな視線を向けるが、抵抗はしない。

「別にどこも打ってないです。あ、勝手に髪をお団子にしないでください」

「だあって、ルリが髪の毛おろしてるとこ久々に見たんだもん」

「別にめずらしいもんじゃないです。……みつあみもダメです」

「ちえ！ てか、アンタ相変わらず髪つやつつやねえ。これで特別なことしてないって、世の女子高生を敵に回してるわね……」

しぶしぶベッドから降りるユキナ。くしゃくしゃになった髪を整えるルリ。

椅子に座りなおしたユキナはもう一度たずねた。

「で？ なんだったの？ 宇宙でなんかあったんでしょ？ 新たな敵？

ゲキガンガー的展開？」

「カイトさんに、会いました」

「ふくん……は？」

予想外のルリの一言に、思わず声が上ずるユキナ。

「……ちよ、ちよっと、もう一回言つて？ 最近耳が悪くなつたのかなく、よく聞こえない」

「カイトさんに……会いました」

「……」

空耳でないことを認識したユキナは、急にマジメな顔になる。そして鼻と鼻がふれあうほどルりに顔を近づけた。

「アンタ、ルリ……それはまずいよ。死者が見えちゃってるよ。連れて行かれちゃうよ」

「……」

「ルリ。死んだ人は帰ってこないの。ルリがアイツのこと本当に大事に想ってるのはわかってる、でもそっちに行つてはいけないの。その川を渡ってしまうとね」 「そんな三途の川の的なものじゃないです。気絶する前です」

「そ、そう」

ハッキリとしたつつこみに少しドモるユキナ。椅子に座り直し、ルリと視線を合わせる。

嘘を言っている目ではない。ゴクリ、と喉を鳴らすユキナ。

「ホ、ホントに……？」

「はい」

ドサツ！とベッドの上、ルリの足のの上に突つ伏すユキナ。

はあく、と大きく息を吐く。体中の酸素を一旦外に出し、体を起こして大きく空気を吸って。

「アイツ、生きてたんだあ」

「……はい」

静かになる室内。風がカーテンを揺らす。

しばらくその静かな時を二人で過ごした。

やがて、頭を整理し終えたユキナが口を開く。

「それで？ ってゆーかどこで会つたのよお？ ナデシコは戦闘中だったの？」

「……」

「あ、わかった！ ナデシコのピンチに颯爽と現れて『君を助けるために来た！』とか」「殺してやると言われました」

「え？」

いつもの表情でユキナを見つめるルリ。しかしその瞳には、いつもの輝きはなかった。壊れたラジオのように、もう一度繰り返す。

「殺してやると、言われました」

「な……なんで……？」

うろたえるユキナに、ルリはポツポツと話し始める。

「アマテラスに……アキトさんが……ボソソジャンプで、急に現われて……カイトさんが……敵に……」

それは断片的過ぎて内容の分かる話ではなかった。ルリ自身、何を喋っているかきつと理解していかないだろう。

ユキナはベッドに座り直すと、ルリをやさしく抱きしめた。身を任せるルリ。

「アキトさんも、ユリカさんもいて」

「うん」

「カイトさんが……」

「うん」

「私、引き止めたかったのに……」

「うん」

「また……いなくなっちゃう……！」

「大丈夫。だいじょうぶだよ、ルリ」

ルリの頭を自分の胸に抱き、包み込むユキナ。

ユキナの身体にしがみつくルリ。小さく、震えていた。

強く、もつと強くその背を抱く。

その悲しみを、少しでも癒せるように。

二人は、親友だった。



ネルガル重工本社、会長室。

アキトは部屋の主を待っていた。ラピスはユーチャリスの調整で、一時別行動だ。

(静かだな)

高層にあるからだろうか。雑音は一切なく、微かに流れるBGMが心地いい。

しかし同時に、その静かな空間はアキトに過去の記憶を蘇らせる。

火星の後継者はアキトから全てを奪っていった。

幸せな未来。

穏やかなる日常。

友達。

愛する人。

(でも、俺は今ここにいます)

火星の後継者のモルモットとして使われていた自分。

ネルガルのシークレットサービスに助け出されていなかったら、今も実験材料に使われていただろう。もしくは、彼女と共に……

(……ミカズチ)

自分を救ってくれた男の、もう1つの名前を思う。

火星の後継者の研究施設で決行された、アキトとユリカの救出作戦。

ネルガルにとっての想定外は2つ。

1つは、直前に敵に情報が漏れ、ミスマル・ユリカが急遽別の場所に移送されていたこと。

もう1つは、カザマ・カイトが同じ施設に存在していたことだ。

カイトは動ける状態にあり、意識もハッキリとしていた。ユリカの移送情報をシークレットサービスにもたらしたのは、実験に参加していた彼であった。本来であれば、後継者の施設にいた見知らぬ男のうわ言だと黙殺されるはずだった。幸運だったのは、「ゴート・ホーリー」が救出作戦に参加していたことだ。ゴートは一瞬戸惑いながら

もカイトの情報を信じ、作戦目標をアキトの救出のみに変更したのだ。彼がいなければユリカ捜索で行動が遅れ、アキト奪還すら成らなかったであろう。アキトの命を救ったのは、元ナデシコクルーの絆の一つだった。

救出作戦に協力を申し出るカイト。

ゴートはカイトの状況について話を聞いていた。

プラントで眠っていたカイトは、後継者側の何者かに連れ去られたこと。

アキトとユリカを人質にとられ、実験に協力させられていたこと。

二人の現状は聞かされておらず、ひたすらに無事を祈って日々を過ごしていたこと。

作戦の終盤、脱出まで後一步のところ、後継者側に追い詰められるシークレットサービス。銃口が向けられる。その凶弾からゴート達を護ったのは、またもカイトであった。

彼は『代替出来ない実験材料』である己の身体を盾に使ったのだ。そして、ネルガルシークレットサービスの救出作戦は苦渋を味わう結果となった。

作戦目標：ミスマル・ユリカ、テンカワ・アキト 両名の救出

作戦結果：救出 1名

救出失敗 2名

意識を取り戻したアキトが聞いたのはここまでだ。その話を伝えている時のゴートの表情を、アキトはよく覚えている。悔しさではなく、怒りではなく、悲しみでもない。己の無力を呪う、そんな表情だった。

アキトは拳を握り締める。その拳を自分に打ち付けたい衝動に駆られた。

(いや、やめよう)

そんなことは過去に何度もやった。その行為が何も生まない事はずっと判っている。

深呼吸をし、ソファに座り直す。部屋の主はまだ訪れない。

ふと、今別行動をとっている少女のことを思う。

(整備班と上手くやれているだろうか……)

アキト以外との会話が不得手な彼女を少し心配する。目を閉じると、少女……ラピスとの出会いがアキトの頭に浮かんだ。

アキトは療養中に、それまでの全てを聞いた。

ヒサゴプラン、反地球連合、ボソンジャンプの生体実験、A級ジャンパーの誘拐、イネス・フレサンジュの偽装死。

……迂闊に手を出せないということ。

度重なる実験で五感の殆どを失っていたアキトの心の寄る辺は復讐のみであった。ただ復讐の為に生き、戦い、その身と精神をすり減らして行つた。その生活が後もう少し続いていたら、恐らくアキトは壊れていただろう。だが、先の見えない暗闇にいたアキトに、その日一筋の光が差し込む。

ある研究施設への襲撃。

その施設は後継者側が嚴重に隠していた場所であり、重要な何かを管理しているものと推測された。そこにはユリカの姿はなかったが、ネルガルの施設から攫われた試験体が1人保護された。

『ラピス・ラズリ』

アキトが救出したその少女は、恩人たるアキトによく懐いた。アキトも、どこか懐かしい雰囲気を持つその少女をよく見舞つた。ラピスの体力が回復してきたある日、ネルガルがアキトのサポートをラピスに依頼し、ラピスはそれをすんなりと受け入れた。当のアキトはそれに反対したが、彼女の意思は想像していたよりもずっと固く、最終的に「無理をしない範囲で」とアキトが折れることとなった。

その後紆余曲折があり、ラピスはアキトにとってなくてはならない存在となった。五感の問題はあるが、彼女のサポートで常人とほぼ変わらぬ生活が出来ている。

そんなラピスに、アキトはよく質問をした。彼女の過去に関する質問だ。

彼女はネルガルの研究所で生まれた。その研究所が、火星の後継者の隠密部隊である北辰達に襲撃を受け攫われた。目的は遺伝子操作

を受けた試験体と地球側の研究の奪取。襲撃後の研究所は、それは悲惨な光景だったらしい。その一部始終を見ていたシヨックからだろうか、度重なる実験の副作用だろうか……彼女の記憶は非常に曖昧であり、それを留めておくことがうまく出来ない。記憶が飛んでしまうのだ。それは十分前の記憶であったり、一年前であったりまちまちだが、救出以前の記憶はほとんど全滅していた。だから、彼女に過去の事を聞くと決まってこう答えるのだ。

“覚えていない”と。

過去を聞く度、少し辛そうな顔をするラピス。しかしその『思い出す』という行為が、記憶欠如からの回復に繋がるらしい。だからアキトは質問をやめない。彼女に少しでも恩返しをしたいのだ。しかし、1つ不思議なことがあった。彼女がいたネルガルの研究所では、試験体を番号で呼称していたという。それは後継者の施設でも同じであった。その1番の理由は、試験体に情を移さず管理する為だ。

彼女に名前はなかった。

だが救出されたとき『ラピス・ラズリ』という名前は、彼女自らが名乗ったというのだ。研究所の誰かが名付けたのだろうか？それとも単にその言葉をどこかで聞いて、記憶をしていただけだろうか？そればかりは、アキトがどんなに推測しても答えのない問題であった。確実に言える事は、彼女が覚えていたということは、よほど強く印象に残っていたことだったのだろう。

今では滅多にそんなことはないが、当初彼女の記憶は頻繁に飛んでしまっていた。先程まで会話をしていた彼女が突然傍を離れ、『あなたはだれ』と怯えるのだ。人の名前を忘れるなど日常茶飯事であり、自分がどこにいるかが分からなくなることもあった。

しかし、自分の名前だけは、ただの一度も忘れたことはなかった。ある日アキトは、自分の名前が好きか？とラピスに尋ねたことがあった。

「すき」

と答えが返ってきた。

何故で好きなのか？と尋ねた。

「覚えていない」

と答えが返ってきた。

答えはいつもと同じだったが、その時のラピスはどこか嬉しそうに見えた。

プシュ!!

静寂がドアが開く音で掻き消され、アキトの意識は思い出の世界から現実へと戻ってくる。

待ち人、アカツキ・ナガレと、ツキオミ・ゲンイチロウが顔を出した。

「やあやあ、お待たせしちゃったねえ」

「御託はいい……さつさと用件を言え」

「おお怖い。ツキオミ君」

「はっ。北辰が地球に来ている」

「……!!」

「狙いはA級ジャンパー……貴様だ、テンカワ・アキト」

「上等だ」

「そこで貴様をエサに使い、奴らをおびき寄せる。待ち伏せ場所は霊園だ」

「なぜ」

「街中では一般人に危害が及ぶ」

「墓なら無駄に人はいない。見渡しもいい。隠れる場所も十分にある……か」

「そういうことだ。日もフレサンジュ博士の三回忌に合わせた。不自然なところもない」

「ああ」

「貴様の服装は不自然だがな。まあ、喪服に見えないこともない」

「……」

「……御意」

一礼すると、そのまま部屋を出てゆくツキオミ。

アカツキはアキトの正面にドカッと腰を下ろすと、腕を組み話し始

めた。

「さて、そつちも聞きたいことがあるって顔だね。名無し君のことかな」

「あの機体に乗っているのはアイツだ」

「そうか。君がそう言うならそうなんだろうね」

「ああ。だが……」

「だが、別人のようだった……と」

「……ああ。何か情報は？」

「未だあの日以来は情報なし。探ってはいるんだけどねえ……どーにも……」

「ミカズチ」

「ん？なんだい」

「ミカズチ。アイツのもう一つの名前らしい。それでも探りを入れてみてくれ」

「了解。人使い荒いねえ、君も。仮にも僕は会長だよ？　つと、どこに行くんだい？」

席を立ち、廊下に出ようとするアキトにアカツキは訊ねる。

「サレナの様子を見てくる」

「そうかい。……テンカワ君？」

「気張るのは勝手だけど、もっとリラックスしてみたらどうだい？　どんな刃も、研ぎ過ぎれば容易く折れるものだよ。たまには笑うくらいの余裕を見せた方がいいと僕は思うね」

「……ああ」

アカツキを一瞥すると、何も言わず部屋を出るアキト。

「やれやれ、僕も甘いねえ」

アカツキはつぶやくと、ソファに横になり天井を見上げた。



「ルリ、落ち着いた？」

「……はい。すみません、ご迷惑おかけしました」

「全然迷惑なんかじゃないよ。もう、大丈夫みたいね」

やさしく声をかけるユキナ。その腕の中のルリの震えはもう止まっていた。

「正直、ワケ分らないことだらけだよ。アキトさんとユリカさんが生きてて、アイツも生きてて」

「……」

「アイツは敵で、みんなの事忘れてるみたいで、ナデシコを襲ってきて」

「……」

「でも」

ユキナの言葉に顔を上げるルリ。その瞳をまっすぐ見つめるユキナ。

「アンタが生きてて、カイトが生きてたんなら、まずはそれでいいじゃないー！」

「あ……」

「気になることがあるんだったら、今度会った時にでも聞けばいいのよ！『その態度はなんだー！』って」

「ふふ」

「それに……アンタの気持ちは、変わってないんでしょ？」

「はい」

ルリはハッキリと答える。

その目にはもう悲しみはなく、強い決意だけがあった。

ユキナはその表情を見て、ルリの頭をゆっくりと何度か撫でる。そして両手でクシヤクシヤつとその髪をかき乱した。

「うん。その気持ちはあれば大丈夫！昔から言うでしょ？ドキドキ恋する乙女は無敵って！」

身体を離し、ベッドから降りるユキナ。置いてあったカバンを持ち上げると、中からファッション雑誌を取り出し、髪を整えるルリに渡す。

「これお見舞い！ ヒマしていたら読みなさい！ じゃ、そろそろ帰るね。もうすぐ部活だし」

「はい」

「大丈夫！ チャンスはいくらでもあるんだから！ 生きてさえいれば……ね」

「ユキナさん……」

少しうつむいた後、すぐに顔を上げる。そしてVサイン。

「がんばれ！ ホシノルリ!!」

そう言い残して、ユキナは病室を出て行った。

「わっ！ 廊下を走らないでくださいー!!」

「ご、ゴメンなさーい！」

廊下から何か聞こえた。

(あ、着信履歴……)

ふとテーブルの隅のコミュニケーションが目に付いた。なんとなく手に取る。

(あ、着信履歴……)

そこには仲間の名前があった。たくさん、たくさん、みんなの名前があった。中でも『マキビ・ハリ』と表示された名前は、着信の実に五割を占めていた。そして、大量のマキビ・ハリの後に入っている名前は必ず『タカスギ・サブロウタ』だった。

ルリはその名前の主に連絡を入れた。どうしても、伝えたいことがある。

ピー！

「こんにちは」

《ぶほお!!??》

《おわあ!! 吐きやがったコイツ!!》

《ごほー! ごほお!! ……はあ、はあ……か、かんちよう!?!》

《おいおい……ハデに飛び散ったな》

どうやら二人は食事中だったらしい。遅めの朝食だ。

《よかつた〜!! 目が覚めたんですね!!》

《艦長、元気そうだなによりです。あとハーリー、鼻から麵出てるぞ》

《そーゆーことはもつと早く言ってください!!!》

《いや、狙ってるのかと思つてな》

《そんなワケないでしょお〜!!》

いつも通りの二人漫才を見ていると、ルリの口元に自然に笑みがこぼれた。

《お前、艦長に笑われてるぞ》

《ええええー!! そんなああああ!!!》

そして伝えた。満面の笑みで。

「ありがとうございます。ハーリー君、サブロウタさん」

今を生きている。今でも想っている。

3年間抑えてきた想いがある。3年前は言えなかったわがママがある。

絶対に直接会つて、必ず「あの言葉」を言つてやる。

だから……

ポカンとする2人の前で、ルリは誓った。

「私、負けません」



「進捗は以上です」

「分かった。行くぞ、ラピス」

先の戦闘で大破したサレナ。その修理状況を確認すると、俺はじつとその様子を見ていたラピスに声をかけた。

二人並んで暗い通路を歩く。どこまでも続く長い道。足音以外何も聞こえない。その時、不意にラピスが口を開いた。

「今……この前の事考えてた?」

横から上目使いに俺を見上げるラピス。

いきなりで何のことだか分からなかったが、アマテラス襲撃のことだと理解する。

「ああ」

「昨日、思い出したの」

「なにを」

「わたし……会ったことある」

「?だれと」

「あの……金色の機体に乗っていたヒト」

「……!!」

歩みを止め、ラピスを見る。

ラピスが過去を語るのは、ここに来て初めてだろう。静かに繰り返す。

「あのヒトに会ったことある。わたし、あのヒトの顔……覚えてる」

こちらに向き直すラピス。とても綺麗な瞳をしていた。嘘を言っている目ではない。

(一体どこで……?)

しかし直ぐに思い当たる。

セキュリティが強固であった、あの火星の後継者の実験施設。そこ以外には有り得ないと。

「ラピス、アイツは……」

詳しく聞き出そうとしたが、途中で言葉に詰まる。

施設での事はラピスにとってトラウマだ。確かに過去の質問をラピスにしてきたが、常に施設のことは避けながら慎重に行ってきた。

施設で実験体同士が顔を合わせる出来事。それは恐らくラピスにとって辛い記憶の1つなのではないか?

「あのヒトは……」

「ラピス」

話を切ろうとラピスの肩に手を置いた時だった。

それは最後まで、『アイツ』が『アイツ』で在り続けた証だった。

「わたしに名前をくれたヒト」

「……!」

その時、頭の中で何かがはじけた気がした。

「名前がないのは呼びにくいって、『わたし』をはじめて呼んでくれたヒト」

そうか……そうだったのか。

「いつもわたしに話しかけてくれたヒト」

瑠璃石の名を持つ、『あの子』と似た雰囲気を持つ少女。

「あのヒトがいなかったら、きつとわたしダメになっていた」

懐かしいと感じたその名は、偶然なんかではなかったのだ。

「痛いこともいっぱいされたけど、負けるなって言われたから、がんばった」

きつとアイツはラピスを救い、ラピスに救われていたのだろう。

今の俺の様に。

「ラピス・ラズリ。いい響き……わたし、とても気に入った」

「ああ」

ラピスを救ってくれてありがとう。

次は俺がお前を救う番だ。

ユリカの為に、あの子の為に。

「？ アキト、泣いてる」

「まさか、そんなことないさ」

「ううん。泣いてる」

「……あ」

もう流れないと思った涙が流れていた。

口に入ったその液体が少し……ほんの少しだけ、『しょっぱい』と思っただのは気のせいだろうか。

「！……これで、泣いてないだろうか？」

バイザーを外し、涙をぐいっと腕で拭う。片膝を地面に突いて、ラピスと視線を合わせた。

マジマジと見つめてくるラピス。

「うん。わたし、あのヒトの名前、教えてもらった」

「ああ」

「……」

「ラピス？」

目の前のラピスの表情が、一目で分かる程悲しそうに変わる。

「……覚えてない。どうして、わたし……」

「……」

「忘れないって、約束したのに。何度も教えてもらったのに」

どうして、と繰り返し呟くラピス。

涙も流さず泣いているラピスの両肩を、やさしく包み込む。

「忘れてしまっても、また記憶すればいい。何度でも思い出せばいいんだ」

「……うん」

「よし。いい子だ」

何度か頭を撫でると、ラピスの顔から悲しみが消えた。

それを確認すると、もう一度ラピスの瞳を見詰める。

「教えてアキト、あのヒトの名前」

「ああ。よく聞くんだけぞ」

今の俺は、きつと上手く笑えているだろう。

「アイツの名前は……」

To Be Continued.

第五話【火星極冠の『パペット』】

お墓。

今日はハーリー君がナデシコCの最終調整のため月にジャンプする日。

そしてイネスさんの三回忌。

わたしはミナトさんと一緒にお墓参りに来て、そしてあの人と再会した。

二年前、私達の前から姿を消したあの人と。

その人は言った。

「キミの知っているテンカワ・アキトは死んだ」

そして……

「キミに、渡しておきたいものがある」と。

渡されたのは『天河特製ラーメン』のレシピ。

なぜ？

彼は五感を失っていた。

もう味も分からないのだ、と。

驚いた。

この三年間で彼の身体はひどく変わってしまった。

でも、ビックリしたけれど、この人は変わっていない。

きつと、この人の根元は変わっていない。

そう感じた。

でも『彼』は？

彼には何があったのだろうか？

知りたい。知りたくない。

もし彼を……

彼をもう一度失うのだとしたら？

せつかく逢えたのに、また消えてしまうのだとしたら？

……

でも、やっぱり知りたい。

知らなくちやいけない。
私の知らないあの人を。
そして知って欲しい。
あなたの知らない『私』を。
あなたを想い続けた『私』を。
だから。

勇気を出して。

「アキトさんに、聞きたいことがあります」

機動戦艦ナデシコ

↳ The Prince of darkness Ⅱ↳

— 傀儡の見る夢 —

第五話

【火星極冠の『パペット』】

「どうですヤマサキ博士、ミカズチの様子は」

火星極冠遺跡作戦総司令部真下。

火星の後継者のボソソジャンプ研究施設がそこにあつた。

そして、彼専用の実験室。

『黒い箱』

と呼ばれるその部屋にミカズチはいた。

「んー、安定しているとは口が裂けても言えないね」

やれやれと首を振ると、いつの間にか後ろに立っていたカトウに答える。

二人の視線の先には、椅子に括り付けられ、おびただしい数のコードを纏うミカズチの姿があつた。

彼の全身は異常なまでに発光しており、何かしら負荷がかけられているであろう身体はガクガクと震えていた。

やがて口から泡を吐き、大きく二、三回痙攣すると、彼の動きは止

まる。

「あー、もう！ 中止中止！ ライン切れ切れ！」

「プログラム切断！ 機体とのリンク切断！」

「おい、死んでないだろうな？ ソレが死んだら元も子もないぞ！」

「やっぱり生きたエサがなけりや家畜は動かんか……」

「これで何回目だ？ 数えるのが億劫になってきた」

「……はあ」

研究員が報告を繰り返してデータを書き直す中、ヤマサキは一人ため息をついた。

「どうぞ、博士」

カトウがお茶を差し出す。

「ああ、ありがとう」

それを受け取り、一口すすするヤマサキ。

「……フウ。で、機体は動いたって？」

「いーえ、うんともすんとも」

「うーん、やっぱ実戦か……」

「ええ。でもこんなことが可能なんですかねえ？」

「不可能を可能にするのが科学だろう？ ま、今回はちーつとキツそうだけど」

「イツキが壊れていたのが痛かったですね」

「……本来二人いて完成するつもりだったからねえ」

壊れる、という言葉に一瞬怪訝な顔を向けるヤマサキ。

「ま、ミカズチが帰ってきただけでも儲けモンなんだから」

「そーなんすけどね」

「さて……カトウ君。ミカズチのことはまかせたよ。優しく介抱してやって。投薬も忘れずに」

「はい。博士はどちらへ？」

『お姫様』の所。連中を跳ばさなきゃいかんからね」

椅子から立ち上がる。

「ネルガルの寄せ集めが動いたらしい。さつきシャトルで出発したそ
うだ」

「例のナデシコ部隊ですか？」

「そうそう。その中にホシノ少佐もいてね、彼女はいろいろと厄介だからねえ」

「そうですね。なんたって電子の妖精、史上最年少の天才美少女艦長！　ですからね」

聞きなれない単語が聞こえ、カトウに振り向くヤマサキ。カトウのその眼鏡が、キラリと輝いた気がした。

「……なんだい？そりゃ」

「いや、巷ではそう呼ばれてるんすよ、彼女。非公式ファンクラブまであります、そういう自分も……！」

一気にそこまでまくし立てた後、ハツと言葉が止まる。眼鏡の輝きも止まる。

「……」

「……」

「……ファンなのかい？」

「……いえ」

「……」

「……」

「(っ)ほんっ！」

二つのわざとらしい咳が、少し静かになった部屋に響き渡った。



月へと向かうネルガルの偽装シャトル。

その中にルリはいた。

対火星の後継者の切り札、新造戦艦ナデシコ艦の受け取りが目的だ。

その機密関係上、正規の軍人を動かすことは出来ない。そのため、乗艦するクルーは最低限必要な数の『元』ナデシコメンバーだ。

《しばらくの間、おくつろぎください》

やけにしたつたらずなアナウンスと共に、禁煙、シートベルト着用のランプが消える。

各々がリラックスし、体を伸ばした時、後ろの扉が開いた。

「お飲み物はいかあつすかあ〜?」

「「えー!?!」」

聞こえてきた予想外の声に、少々大きさに驚きながら皆がそちらを振り向く。

そこにはなぜかスチュワーデスの服装に身を包んだユキナとジュンが……

「ジュースにコーラ、ビールに水割り、おつまみもありますよん♪」

「ちよ、ちよ、ちよつとユキナ! 何でアンタがここにいるの、もう!」
やはり最初に動いたのはミナトだった。

ルリもそれに続いて身を乗り出し、見ていたレシピから視線を移す。その先では、ユキナとミナトが言い争っているようだ。

ジュンにいたっては女性クルー達に絡まれて散々な目にあっている。

「か〜わい〜!」「剥いちやえ剥いちやえ〜!」「あはははは!」

などの声に混じって聞こえてくる「や〜め〜ろ〜よ〜!」という声が哀愁を誘う。

「〜!! ちよつとジュン君! アンタまで何やってんのよお!」

ミナトが標的をジュンに定める。その隙に、ユキナは素早くルリに目配せをした。

(ルリ!お願い〜!)

(しかたないですね)

ユキナの視線を受け、シートから立ち上がるルリ。

「ミナトさん。とりあえずこの話、月までお預けにしましょう」

「うん、そうそう! お預けお預け!」

「……アンタ、いつか痛い目見るよ」

「はいはい」

「〜っ! んもう!」

ミナトは「文句言ってくる！」とフライトデッキに、ユキナとジュンは着替えるために搭乗員室に入ってゆく。

席に戻ったルリは、墓地でのことを思い返していた。



「ごめん」

「？」

「実は俺も今のカイトのことは知らない。情報がないんだ」

「そう、ですか」

「でも、昔の事なら少し知っている。カイトも俺達と同じで奴等の研究所に入れられていた」

「！」

「俺は施設内で二度、カイトを見たことがある。最初は奴等に囚われて少し経過した時」

「……」

「そして施設から逃げ出した時だ」

「カイトさんも実験を受けていたんですね。じゃあ、カイトさんが変わってしまったのもそのせい……」

「……いや、そうじゃない」

「アキトさん？」

「そうじゃないんだ、ルリちゃん」

「はい」

「カイトがああなったのは俺のせいだ」

「え？」

「アイツは俺を逃がすために盾になって奴等に再度囚われた」

「……」

「俺が動けていれば……カイトは今、君の隣にいたはずだ」

「……」

「すまない、本当に」

「……」

「俺が、代わりに捕まっていれば」

「っ!!」

バチン!!

「!」

「痛いですか」

「え?」

「ほっぺた、痛いですよ。二回目ですし」

「あ、ああ」

「なら、それで許してあげます。カイトさんが、今ここに居ないこと」

「……は?」

「それより、これからどうやってユリカさんとカイトさんを助けるか考えましょう」

「ちよ、ちよつと待ってくれ」

「なんですか?」

「いや、俺がいたからカイトは!」

「カイトさんはアキトさんが好きだから助けた。それだけじゃないですか。カイトさんのいつもの自分勝手です」

「でも! 許されるようなことじゃ……!」

「カイトさんがアキトさんを恨んでいるとでも? 私がアキトさんを恨むとでも?」

「……」

「私はそんな人間じゃないです。私の知っているカイトさんも、少なくとも自分の意思で助けた相手を恨むような人ではありません」

「それは……」

「まあ、世事に疎いですし、デリカシーないですし、何度言っても寝癖直さないですし、ラーメン以外の料理は正直微妙ですし……」

「は、はは……」

「でも」

「うん……」

「優しくて。一生懸命で。真っ直ぐで。自分より他人を気遣う、そんな人です」

「……ルリちゃん」

「なのに、せっかく助けたあなたが『代わりに捕まればよかった』なんて言ったら、カイトさんはきつと悲しみます」

「うん」

「それにアイトさんが捕まっていたら、一人でも絶対に助けに行きますよ。あの人は。そしたら二人とも捕まっちゃってます。きつと」

「……そうだね」

「どうしても謝りたいんなら、今度はアイトさんがカイトさんを助けて、その時謝ればいいだけです」

「ああ」

「だからそんなこと……悲しいこと、もう言わないでください」

「わかったよ、ごめん……いや、ありがとう。ルリちゃん」

「はい。すみません、少し偉そうでしたね」

「いや、いい。おかげで胸のつかえが取れたよ」

「では、ミナトさんが待ってますので私はこれで」

「? いいのか、俺の動きを聞かなくて」

「いいんです。信じてますから。じゃあ……」

「待ってくれルリちゃん。伝えたいことがもう一つあるんだ」

「伝えたいこと?」

「カイトの言葉だ」

「カイトさんの……?」

「ああ……あの時——」

『ルリ? ちょっとルリー!!』



突然耳元に聞こえてきた大声に思考が中断される。

「ユキナさんうるさいです。こんな狭いところで大声出さないでください」

「だあってえ〜……いつまでたつても気付いてくれないだもん！」
着替え終わったユキナが少しすねた声を出し、ルリの隣に座る。そしてその手にあるレシピに目を移した。

「? なによそれ」

「テンカワ特製ラーメンのレシピです」

「なんでそんなの持ってたの?」

「お墓でアキトさんに会ったんです。そのときにもらいました」

「お墓で!?!」

「先に言っておきますけど、三途の川的なものではありませんので」

「……わかってるわよ」



「今日もお姫様はゴキゲンなようだねえ。よかったよかった」

ヤマサキの目の前に開いた無数のウインドウ。

『イメージ伝達率98%』という文字が、ハートマークと共に表示されている。

火星極冠遺跡、そのジャンプ施設がにわかに活気付いた。

「ナデシコ部隊の偽装シャトル捕捉! 周りに護衛船団がいる模様!」

『『積巳気』第一波跳躍! 続いて第二波、第三波、跳躍準備!』

「マルチモード、順調に作動中です!」

「順調つすね」

オペレーターが次々と報告を繰り返す中、後ろの扉が開きカトウが顔を出す。そのままヤマサキの隣にやってくる。

「奴らの目的はなんなんスかね? あっちにはなーんにもありませんよ?」

「さあねえ、目的がなんにせよ早めに叩いておくのにこしたことはない」

「ですね」

「ミカズチは？」

「精神安定剤うつて置いときましたよ」

「……そ、ありがとさん」

「なんのなんの。にしても、前回の戦い『ブースト』投与後にミカズチの動作が止まるのは予想外でしたね」

「ああ。お姫様がテンカワ君をクリアしたと思つたら、今度はミカズチがホシノ少佐で止まるとはね。こればっかりは」

「ブースト投与の量をガッツリと増やしてみたらどうです？」

「ミカズチが壊れちゃうだろう。ただでさえギリギリまで投与してるんだから」

「いいんじゃないすか。いつそ壊した方が戦闘力UPするかもですよ」

「……」

「じよ、冗談ですよ博士！ 怖い顔しないでくださいよ……」

「な……!?! 未確認戦艦出現!!」

「重力波砲発射！ 積巳気第一波、第二波が消滅しました!!」

「……なに？」

「積巳気部隊、地球側の護衛艦隊に追いつかれました!!」

「敵機動兵器多数展開！ このままでは……」

突然の事態に騒然となる施設。

このまま成功するかと思われた作戦の突然の失敗。いや、問題は失敗したことではない。問題は……

「……時空跳躍だど？」

そう。問題は「それ」が跳んできたことにある。

完全に掌握したはずの跳躍システム。時空跳躍を独占した後継者側は常時有利に戦いを進められるはずだった。なのにあの戦艦は跳んできた。チューリップからチューリップなどではなく、直接その空間に。

(誰が遺跡にイメージングを……?)

残る地球側のA級ジャンパーはテンカワ・アキトただ一人だったはずだ。しかし、彼が動いたという報告は受けていない。だとすれば……

「イネス・フレサンジュ……」

「え、なんすか?」

「いや、ミカズチを起こしてきてくれるかな。すぐに跳んでもらうよ」
「……ええ。了解です。ヤマサキ博士」

「今回の戦闘は非常に重要だ。彼女らが次元跳躍を使えることは百害あつて一利なしだ」

「確実に殲滅、ですね」

「そのとおり。ちよつと危険だけど、ブーストを一割り増しで投与」
「いいんですか?」

「ああ。でもこれで100%、限界だ。今回負けたらまた何か考えなきゃいけないねえ」

「了解です。実験と同時進行でよろしいですか?」

「ああ。頼んだよ、カトウ君。私はもう少し経ってから直接格納庫に向かうよ」

「かしこまりました」

スツとその場を離れ、廊下に出てゆくカトウ。

モニターに気を取られていたヤマサキは気付かなかった。カトウの口元に浮かんだ、その歪んだ笑みに。



「にしても……」

ナデシココ艦橋。

全方位モニター採用により足元までクリアーに見通せるようになったその場所で、アオイ・ジュンはつぶやいた。

新造戦艦ナデシコC艦。

偽装シャトルのピンチに計ったように現れたその戦艦は、強大な出力のグラビティブラストで一瞬にして火星の後継者の部隊を殲滅してしまった。

このC艦は全ての面で今までの艦を凌駕していた。

格納機体の数、フィールド出力、装甲の厚さ、エンジン出力。果ては風呂の広さから食堂のメニュー増加まで。しかし一番の特徴は、その巨大な体に組み込まれた独立型ジャンプユニットにある。これによりナデシコがどこにしようが、チューリップクリスタルなしでのジャンプが可能になったのだ。

無論、A級ジャンパーが必要だということには変わりはないが。

「それは別にいいんですけど、どうしてユキナちゃんがここにいるんですか？」

ジュンはオペレーター席に我が物顔で座っているユキナを見ながら、隣にいたゴートにぼそぼそと話しかけた。

「いや、彼女強引でな。なんかやらせてくれなきゃ飛び降りる、ということだからな……」

ゴートもジュンに合わせ、コソコソと話してくる。

男二人が寄り添って、少し気持ち悪い。

「とりあえずそこに座らせてみたんだが」

「居ついでしまった、と」

二人してその方向に目を向け同時にため息をつく。当のユキナはシートのリクライニングをフルに活用して、うくん、と大きく伸びをしている。

戦争の真っ最中だというのに、艦内ではだらだらとした空気が広がっていた。

パイロット陣はシミュレーター、ミナトは自室、ルリは読書、ハーリーはというと。

「そ、その本いつも読んでますよね、どんな本なんですか？」

などと必死にルリに話しかけている。ルリの反応は薄い。

クルーは各々好きなことをしてこの暇な時間をつぶしていた。

と、いうのも……

《おくい、ルリルリ！　こちらウリバタケ、やっぱりパーツがたんねえ。修理は月までお預けだな。ジャンプのテストが不十分だったのかね》

「はい、わかりました」

ナデシココ。

現在ジャンプユニット故障中。

ネルガル月ドックまでもうしばらく。

そして……

《妖精に付き添えるとは……まさにナイトの特権！》

おまけ付。



「駄目だ、そんな量のブーストを投与したらオーバードーズで下手すれば……」

「あ、大丈夫大丈夫。ヤマサキ博士のお墨付きだから」

「ヤマサキ博士が？　……いや、駄目だ！　こんな量ありえない！」

「命令に逆らうんですか？」

「……ヤマサキ博士と話がしたい」

「博士は現場、手が離せないから伝えてきて欲しいって言われたんだけどなあ」

「……！　確かに博士の指示なんだな？」

「そうそう。アレが寝てる間にチャチャツとやっちゃってください」

「……ああ」

「あ、みんなの動揺を招くかもしれないから、このことは内密にね」

「……」

「じゃ、オレはおっ先にイ」

医務室のドアが閉まる。

格納庫に向けて歩き出すカトウ。

「さて、問題です」

楽しそうに、一人つぶやく。

「普段の二倍油をさした人形は、その分よく動くのでしょうか？」

その眼鏡が、鈍く光を照り返した。

To Be Continued.